特219
667

鄉土資料研究第一輯

富山縣鄉土地理

富山市小學校長會

始

特219
667

はしがき

本會は一兩年前より鄉土資料の研究を試み、茲に其の第一輯として鄉土地理を編纂した。更に歷史、理科、修身、國語、實業等に就いて次を追うて出版する豫定である。

本編蒐むる所は敎授上の參考に資する爲であるが、又多少研究として發表したい點もあるので、從つて繁簡宜しきを得てゐない點もあらうし、又研究の足りない點も多からうしと思ふが、讀者先覺の批正を仰いで遺を補し稿を改めて行きたいと思ふ。

昭和四年三月

富山市小學校長會

昭和四年一月 市圖

富山縣鄉土地理目次

第一章　自然的地理資料

第一節　位置及廣袤……一
第二節　地勢及地質……一
一、概　觀……二
二、日本の地體構造論から見た飛騨山脈……二
三、飛　騨　山　脈……三
四、立山附近の地質構造……四
五、立山連峰の意義……六
六、立　山　火　山……七
七、立山のカール(Kar)問題……九
八、劍　岳……一〇
九、黑　部　峽　谷……一二
十、寶　達　山　脈……一三

十一、吳羽、城山丘陵……一四
十二、平野と河川……一六
十三、本縣の主なる溫泉……二四
十四、海岸地形……二五
第三節　海洋……二六
一、日本海測量史……二六
二、富山灣測量史……二六
三、日本海……二六
四、所謂能佐海溝……二七
五、富山灣の海底……二七
第四節　北陸地方の氣候……二八
一、位置……二八
二、地形……二九
三、氣候の概畧……二九
第二章　人文地理資料
第一節　住民……三三

一、富山人の勤儉力行生活……二三
二、富山人の精神生活……二三
三、富山人の品格……二四
四、富山人の經濟生活……二四
五、富山人の團結性……二五
六、富山人の宗教生活……二五
七、富山人の人情……二五
第二節　產業……二五
一、產業全般……二五
二、賣藥業……二八
第三節　動力及交通……四一
一、日本に於ける水力電氣の發達……四一
二、富山縣に於ける電氣事業の趨勢……四四
三、交通……四八
第四節　聚落……五二
一、居住地理學上より見たる越中平野……五二
二、越中國西部の莊宅(Homesteads)……六一

三、富　山　市……七〇
四、高　岡　市……八一
五、伏木港の現在及將來……八四
六、聚　　落……八八
七、其の他の主なる町……八九
八、地學上より見たる越中氷見の洞窟……一〇〇

富山縣鄕土地理

第一章　自然的地理資料

第一節　位置及廣袤

我が富山縣は北陸地方の畧中央に位し東は新潟、長野の二縣と西は石川縣と相接し南は岐阜縣と背中合せになつてゐる。

東端は東經百三十七度四十五分（越後、信濃、越中の境界點）、西端は東經百三十六度四十六分（越中、加賀、能登の境異點）で南端は北緯三十六度十七分（越中、加賀、飛驒の境界點）、北端は北緯三十六度五十九分（越後、越中の境なる境川河口）である。

面積は二百七十六方里隣縣石川と比肩し全府縣中第三十二位を占め東西二十三里餘、南北二十一里餘である。

而して富山市は東西一里三十町四十間、南北一里九町で周圍は六里三十四町である。

第二節　地勢及地質

一、概　　觀

本縣の形狀は恰も胡蝶の翅を擴げたやうである。飛驒山脈の北端及其の餘波は本縣の東、南、西の三面を包み北の一方のみが深い富山灣に望んでゐる。

飛驒山脈及飛驒高原は片麻岩、花崗岩、古生層、侏羅紀層（手取層）等によつて構成され其の山麓部に第三紀層が發達して越中平野の周邊を成し更に此の第三紀層に次ぐに洪積層の丘陵が平野に接して居る。河川は皆之等の山地より源を發して富山灣に注いでゐる。吳羽、城山の丘陵は飛驒高原より半島狀に平野に突出して吳東平野と吳西平野とに二分する。吳東平野は黑部川によつて構成されて黑部扇狀地及早月、常願寺、神通等の諸川によつて構成された富山扇狀地よりなり、而して富山市は此の地方文化の中心をなして居る。吳西平野は庄川、小矢部川等の流域で高岡市を以て文化の中心とする。

茲に注意を要するは本縣の河川は山地では非常な急流で俄かに平野に移つて緩流することで、所謂河川としての中流を缺いてゐるのである。

富山灣は北方能登、佐渡の中間に深い海濠が突入し小なる出入に乏しい。

二、日本の地體構造論から見た飛驒山脈

我が日本島は地形上から東亞大陸の邊緣に弧狀列島を成して居る。我が地質學界の曙光時代に貢獻された故 Edmund Naumann 氏以來多くの學者によつて本島の地體構造は論ぜられて居る。即ち日本島を南北に分離する靜岡――糸魚川間にS狀の大なる地溝帶を認め之を Naumann は Fossa Magna と稱したが後東北帝大の矢部長克博士は糸魚川靜岡線と稱せられた。此の構造線を境界として北日本の山系と

南日本の山系とが對曲地形を成すのである。京都帝大の小川博士も亦地質上から論ずるときは此の分類を以て正しきものと述べ更に一歩を進めて地形上から論じて此の二分說に對する三分說を提案してゐられる。それは東北日本と中央日本と西南日本である。飛驒山脈は日本全國中にて最も高峻なる地域で中央日本に屬して居る。又日本を內外二帶に分ち其の境界を中央線（median line）と稱する一の構造線によつて分けて居る。即ち西南日本の中央線を西方から追跡すると伊萬里―久留米―松山―吉野川の谷、紀の川―櫛田川―豊川―天龍東側支流、諏訪地溝に續くのである。

故に本縣を圍繞する山には飛驒山脈、飛驒高地の北部を占めてゐて皆內帶に屬するものといふべきである。

三、飛　驒　山　脈

Fossa Magna の西側に三千米內外の高度に迄聳え立ち一方には富山灣が一千米以上の深さを保つて迫つてゐる。飛驒山脈の東側は一大斷層により斜面が非常に急であり、西側の飛驒側に於て極めて緩かである。即ち本山地の東西の截斷面は恰も不等邊三角形の最小邊を東にして其の最大邊を水平に置いた樣である。但し北部の越中平野と立山山脈との界は複斷層を以て著しき急傾斜をなしつゝ平地に移化して居ることは注意を要する點である。

飛驒山脈を構成する主なる岩石は古生代の水成岩と之を貫く花崗岩類とより成つて南部は主として水成岩、北部は火成岩の露出が多い。其の間更に安山岩類の新期火山岩が諸處に噴出してゐるが花崗岩の分布は最も廣大な面積を占めて居る。

其の花崗岩は黑雲母花崗岩と角閃花崗岩とに區別することが出來る。此の兩岩石の接觸線は大體に於て南は梓川の上流上高地と北は黑部川の支流東澤との連絡線を以て東西に分つて居る。黑雲母花崗岩は其の東側を占め、角閃花崗岩は主に其の西側の三俣岳有峯附近から起つて立山山脈の主體を構成してゐる。有峯附近は中生代（手取統）の地層に被覆されてゐる西部の飛驒地方の峰々は曾つては準平原の狀態にあつたが地塊の上昇運動によつて庄川、神通川、益田川等の上流の河蝕及風化の進んだ結果は千二三百米の解析高原となつたわけである。

有峰附近は盆地をなし地表の凹凸極めて緩く、谷は濶くて淺く、山は低くて傾斜の度も少く田畑なども開けてゐて此の山間に此の平野あるかと意外の感がする。

日本アルプスと呼ばれる飛驒山脈は飛驒、信濃の國境に連なる穗高、槍嶽等より西北に亘り三俣岳に至つて二つに分れる。一は殆ど正北の走向を有し信越の國境を劃する白馬山脈（後立山々脈）となり幾多の峻嶺高峯を崛起し遂に親不知の斷崖となつて日本海に沒する。他の一は稍西方に折れ黑部五郎嶽、上ノ岳より太郎山となり淨土山より雄山、大汝、別山に連り劍嶽より更に猫又山、毛勝岳、駒岳、僧岳等となり愛本附近に至つて黑部川の左岸平野に沒してゐる。是が即ち立山々脈である。

四、立山附近の地質構造

立山々脈は太古代片麻岩系の構造山脈中に古生代末に於て主として角閃花崗岩の噴出したもので其の南部は前章の太郎山有峯附近にあらはれ更に佐良峠以北の鬼、餓鬼、龍王、淨土から立山の主峯雄山、大汝に及び尙眞砂、別山、劍嶽、仙人嶽等より更に北に進んで赤谷、猫又、毛勝、駒、僧等を崛起し茲に高峻な山體を構成するに至つた。立山附近に著しい片狀層理をなす角閃岩は噴出後働力變成によつて花崗片麻岩と變ずるに至つたものである。此の岩石は立山々脈の骨骼をなすものである。是の山體の所々に石灰岩層がある。多くは粗粒狀の大理構造を呈し中に石墨の細片を挿入するものもある。此の石灰岩は神岡鑛山に於て礦石の熔煤とされ農事方面に於ては黑部、常願寺川等の河谷、山麓の所々に於て石灰肥料として居るのである。

立山々脈中の中生層としては有峯附近に分布する Jura 紀層所謂手取層に相當する砂岩及礫岩で花崗片麻岩を被覆してゐる。砂岩は石英質で硬い。礫岩は古生層諸岩の礫と黑雲母花崗岩の礫と混入してゐる。

藥師岳は其の頂上の地質は本地層を貫く角閃小紋岩によつて構成されてゐる。立山の五ノ越から雄山の頂上に向ふ間及富士の折立から眞砂に移る間に本岩の小露出を見る。水須村附近の Jura 紀層の砂岩中に植物化石を產する常願寺川の沿岸龜谷才覺地及芦峅寺附近は中生代の砂岩、負岩より成り時に石炭の挾在するものさへある。此の Jura 紀層の化石を採取するに好都合の地は神通川上流庵谷發電所附近であつて負岩、砂岩中に羊齒類、蘇鐵類の植物化石がある。附近は中生層と第三紀層との接する處で幾多地形地質の謎を有して居る。

第三紀層――立山々脈の西側即ち上新川、中新川、下新川の高峻なる山脈に對して前山をなすもので一帶に丘陵臺地となつて第四紀洪積層に接してゐる。常願寺川方面では新川橋附近から芦峅寺の東方志鷹方面にあらはれてゐる下部層は疑灰岩、安山岩、角蠻岩である。又上部層は主として芦峅寺より下方

にある。特に新川橋附近の左岸臺地の下部に好露出がある。其の粘土質砂岩中からは貝化石及植物化石を產する。

地形上からも地質上からも本縣で最も興味のあるのは立山連峰である。先年踏査の結果を地理敎育に掲載した半は記行的、半は學術的の小論文があるから左に挿入する事とす。

五、立山連峯の意義

富山方面から見ると雲表に聳えた峯は立山ばかりではないが、あれが立山であるといふ事は彌陀ヶ原の熔岩臺地が一線を描いて若い地形を示して居るので直ぐに分る。其の彌陀ヶ原を登りつめた處が雄山（五萬分ノ一地形圖には二九九二米とあるが頂上は三〇〇三米）であるが大日岳（二六〇六米）といふのが其の前に立ち塞つて居る爲に見處如何によりては頂上は見えない。立山の北に彌陀ヶ原とは全然趣を異にしたガグガグの劍嶽が聳えて居る。恰も鋸の齒のやうであるが登つて見ると劍の齒渡りをするやうな感があるから斯く命名されたものである。何故こんな地形を呈するかといふと之は片麻岩からなつ居て片狀に剝離するからである。此の立山、劍岳のつゞきが池平、仙人、猫又、毛勝となつて次第に低く

（圖原三吉）（リ＝村從大外郷市山賀三郎）圖解學理地形

遂に海に消えて居る。

一方立山と肩を並ぶる英峰で西南の雲表に聳えて遲く迄雪を蓄えて居るのは藥師岳（二九二六米）で以上を立山連峯といつて居る。

六、立山火山

是等連峰の中、立山丈けは和漢三才圖繪などにも記錄があつて既に遠い昔から登山者が多く此の頃では一年に一萬人を上下するの多數に上り、登山期は七月上旬から九月下旬迄約二ヶ月であるから一萬二千人とすれば一日平均二百人となる。從つて立山の如何なるものかは廣く知られて居る事であるが併し深く研究されたものは少い。先年縣下中等學校の博物科敎師諸君の手によつて立山概觀（非賣品）が出版された。近くは立山通として夙に令名ある吉澤庄作氏の著述「立山」が公にされた。又立山登山口芦峅寺を鄕里として幼少の頃より立山と親みを持ち大學の卒業論文に立山火山を選んだ理學士佐伯謙吉君の研究論文がある。筆者は之等の研究論文を讀み山に近いといふ便を得て居る爲夏に春に秋に之迄幾回か登つたのである。始めの間は彌陀ヶ原に興味を感じて居たので彌陀ヶ原及立山溫泉附近を踏査した。彌陀ヶ原の一直線が複雜な地形を破つて居る處は遠くで見ても面白いが登つて見ると之は其の實四段になつて居る事が分る。此の單調な地形は立山火山の熔岩流（Lava flow）であつて稱名川と湯川との合流點、藤橋附近が其の終端のやうに地形學上考へらるゝが佐伯君の研究では熔岩は藤橋附近では對岸に渡り更に志鷹谷附近で兩岸に跨りつゝ千垣附近迄流出したやうに思はれるとある。此の藤橋附近の熔岩流を登る處が材木坂で登りつむれば美女平となり更にブナ坂を經てブナ平となり、それから彌陀ヶ原尙其

の上が室堂高原となる。斯く斷崖に次ぐに高原、斷崖又高原と繰返さるゝのである。

材木坂から登ると植物帶が次第に變るので此の路は博物學者に面白いが稱名を傳ふて稱名瀧へ出ると熔岩流の側面が露出して居るので地質學者は之を選んだがよい。筆者は山岳用アネロイドバロメーターを所持して居たので計つて見ると、瀧壺から實に四二〇米突の大斷崖で之を攀ぢ登る新道が開かれ瀧は華嚴以上の壯觀で終始瀧を顧みつゝ彌陀ヶ原の中央に出られるのである。一體美女平、ブナ平、彌陀ヶ原、室堂高原など四段にもなつて居るのは噴火口から四回、五回或はそれ以上幾回にも亘つて熔岩流が溢出した事を語るものである。又彌陀ヶ原と相對して東南部に五色ヶ原といふ熔岩臺地を見る。是等の熔岩流は何處から出たのであるか、卽ち噴火口は何處かといふと山頂ではない。立山は全山皆火山といふ譯ではないのである。從つて標式的な富士山などとは同一に論ずることが出來ない。五萬分ノ一地形圖立山圖幅を開いて直ぐ眼を引かるゝのは淨土山、龍王山、鬼岳、ザラ峠、鷲岳、鳶岳を連ぬる線が直徑一里位の圓形を描いて居る事である。而して等高線が非常に密になつて急傾斜たる事を知るのである。此の圓形が噴火口に違ひない。其の中には今も餘勢と見るべき立山溫泉がある。然し筆者の考ではその少し北に位する新湯附近が中心であると推斷を下して居る。新湯の中へ寒暖計をつき込んで計つて見ると攝氏七十三度を示した熱湯をグラグラ湧して居る景は凄じいものである。其の附近に横はつて居る刈込池は火口湖である。

立山溫泉附近は安政五年二月廿七日大鳶山の大崩壞によつて非常に破壞された。雨の降つた後では必ず今も崖崩があつて此處から流れ出す湯川に傳ふて下る路は危險である。縣では砂防工事に餘程力を注

いで居るが、なか〳〵難工事との事である。立山溫泉は六月十日頃から開いて、十月廿日頃迄約四ヶ月間に一萬三千人の浴客を數へるといふ。平均一日百人以上となるが多い日は五百人にも上るとの事で實に盛んなものである。

彌陀ヶ原から室堂に至る途中二三〇〇—二四〇〇米の間、山の七合目とおぼしき邊りに地獄谷がある。熱湯の煮えかへつて居る處、汽車の機關車が蒸氣を吹いて居るのにも似た活況は實に地獄の名に背かぬものである。或は子供の玩具のやうなと形容し度い位小さな圓錐形の火山模型見たやうなのもある。之は立山溫泉盆地卽ち噴火口よりは後のもので、爆裂火口である。附近にミクリガ池、ミドリガ池など今は火口湖となつて水を湛えてをるものもある。それから室堂を經て頂上に向ふのであるが俄かに急傾斜となり、一ノ越から二三四五の越を通つて雄山神社に達するのである。筆者は之から脊梁縱走を試み大汝山、富士の折立、別山乘越、別山を經て劍小屋に下つた。

七、立山のカール（Kar）問題

此の縱走中に最も興味あるは今述べ來つた彌陀ヶ原、地獄谷、立山舊噴火口壁など所謂火山地形が眺めらるゝ事であるが是等は山の西側で東側を見るとは非常に異つた地形に驚かさるゝのである。脊梁を境として西には雪が少いが東には七月廿六日といふ酷暑の盛夏の時に未だ一杯雪を蓄えて居る。其の雪の蓄えられて居る處は盃の半割狀に凹んだ地形を呈して居るので今日アルプス登山者が否學者の間にカールとし誰も疑ふ者はない。之が氷河の遺跡であるといふ事を初めて稱へ出されたのは東大の山崎博士で今から三十何年の昔東京地學協會の講演に於て發表された。博士より直接聞いたわけではないが故大

關教授と先年鎗岳、三俣、五郎、烏帽子岳の縱走をやつた時立山を向ふに見て盛んに氷河問題を論じた際聞いた事である。

今や氷河地形として誰も疑ふ者は無いやうになつたが當時は誰も疑つて信ずる者がなかつたといふ事である。只茲に一言附け加へて置き度い事はカールが氷河作用で出來る事は勿論だが又雪によつても出來るといふ事である。今雄山から別山へかけて春梁縱走中に西側は雪が非常に薄いが東側は非常に厚い雪渓となつて殘つて居る。之は風が西北から吹いて來て皆雪を東斜面に吹き飛ばすからで從つて東斜面は長く雪を蓄へ其の浸蝕を受くる事が長く且大である。然しあの大きなカールを雪の力とのみ見る事は無理で其處に山崎博士が氷河といふ事を考へ出されたものと推するのである。

カールは藥師岳のが大變立派である。昨夏筆者は有峰より入つて藥師縱走、スゴの乘越を經て五色ヶ原、平小屋、針ノ木峠より大町へ出たが此の時藥師岳東北面に横はつて居るカールを見て非常に氷蝕の大なるに驚いた。遙かに立山以上の美事なものである。（五萬分ノ一地形圖參照）（地球昭和四年四月號理學士今西錦司劍澤の萬年雪に就いて參照）

八、劍　岳

別山から北に降つた處に劍小屋がある。海拔二五〇〇米に位して四面雪で閉ぢ込められ流石に此處迄來ると高山氣分に滿される。氣温は午後五時頃で攝氏十八度、附近には山櫻が開いて居る。此の小屋は大阪毎日新聞社で登山者の爲に建てゝくれたものである。

扨此の小屋から劍岳を眺めると八ツ峯といつてガク〳〵の峰頭が八つ。但し數へやうによつては十二

劍の地圖は陸地測量部發行の五萬分ノ一地形圖を以て彩色を以て彩色を以て彩色したものである。以下は平地を以て彩色を以て彩色を以て彩色

にも十三にも或はそれ以上にもなる鋸齒狀の嶮岨な山姿が眼前に迫つて居る。其の中で頂上に登る澤に平藏澤と長次郎澤との大雪溪がある。卽ち立山案內者の元老佐伯平藏が始めて此の澤を登つたといふ處から其の名が出た。長次郎澤も長次郎の功を記念して居るものである。一行は其の勾配を計つて三十度といひ四十度といひ或は其の平均を取つて三十五度といひ盛んに論爭して居たが三十度以上の勾配を持つた大雪谿を上るのは實に難事である。一體劍岳が八ッ峯などゝいはるゝ樣に嶮岨な地形を呈して居る理由は山體が片麻岩からなつて居る事に基くのである。それで頂上を極むる迄には劍の齒渡りをする思を二三ヶ所でしなくてはならぬ。一行は皆命懸けの思をした。若し誤つて一歩を踏みはづさうものなら止る術はない。谷底へ向つて七轉八倒怪我をするか命を失ふかしなくては濟まない處で、恐らく日本アルプス中でも之以上の處はないかと思ふ。此の平藏澤の雪溪を登り初めたのは午前六時四十五分それから一時間四十五分にして登り終つたが、更に雪溪の上の岩の裸出せる處で其處は片麻岩が剝離面に沿ふて甚だ危險狀態になつて居る處を傳ふので、再び命懸けとなつて二九九八米の頂上に達した。時に午前九時半であつた。高山は天氣のよいといふ日でも晴れて居るのは午前中である。故に筆者の山頂を極めた時は丁度よい時刻で黑部の峽谷は脚下に二〇〇〇米の深谷となつて迫つて居る。下界は雲海に閉されて居るが高山は其の上に頭を擡げて白馬連峰から鎗岳一帶實に指呼の間に打ち眺められ、殊に一行をして快哉を叫ばしめたのは富士が遠く僅かに山頂のみを見せてゐた事である。大自然を征服した快と共に溫かい慈母の懷に抱かれた感があつた。此の氣持は永久に忘れられない處で越中平野に下つて立山を見上ぐる度毎に當時の氣分に湧き戻つて來る。長次郎澤は平藏澤に比べると緩傾斜であるから下るには之

を選んだがよい。下るに一時間十五分を要した。早い人は三十分でゞも下り終るさうである。然し筆者は斯んな處を急ぐはつまらぬと考へたから一歩一歩踏みしめて雪渓下りの興味を味ひつゝ時間をかけたわけである。それから三ノ窓、小窓を西に見て劔川を下り池ノ平小屋で大窓を近くに見る。玆に三ノ窓といふのは大窓を一ノ窓とし小窓を二ノ窓として三ノ窓の命名を見たものと推察する。窓といふのは澤の頂上U字形をした恰も窓を望むに似て居る處から獵師が名づけたのである。此の地形に接すると氷雪の浸蝕が如何に大であるか又片麻岩が如何に剝離し易いかといふ事が能く理解される。

鎗ヶ岳は日本のマッテルホルンといつて居るが、今では登山に便利となつたから昔のやうな危險はない。寧ろ劍は鎗以上の危險性を帶びて居る。劍の好敵手は穂高である。穂高の雄大なるには及ばぬかも知れぬが危險性を帶びて居る事は確かに劍が勝つて居るといへる。

九、黑部峽谷

池ノ平小屋から大窓を左に見て小黑部の雪谿を下り川岸を傳ふて猿飛附近で黑部の本流と合し鐘釣溫泉で連日の疲勞を慰し宇奈月迄峽流傳ひに下つた。池の平小屋から新鐘釣溫泉迄川の延長は三里半だが行程は六里普通十時間を要するといふが余輩は午前六時に出て午後五時に着いた。即ち十一時間を要して居る。而もそれが下りであつて斯かる長い時間を要する事から考ふれば只それ丈けでも如何に峽流で且嶮岨であるかといふ事が分る。一體黑部の峽谷は如何にして出來たものであるか。頂上から谷底迄は二〇〇〇米内外の急傾斜で兩崖は大絶壁一歩を誤れば命を奪はれるといふ處が幾個所あるか分らない。東には白馬連峰が横はつて其の東邊は松本盆地などゝ共に Edmund Naumann の所謂大斷層なるものが

第三紀時代に出來た處で之に平行の之より小さな斷層はあつて差支ない譯である。即ち其の一に相當するもので構造谷と考ふるべきであるが如何。或は故加藤鐵之助學士の立山山脈、白馬山脈、鎗ヶ岳山脈等褶曲山脈の間の谷とするが當を得て居るか如何。筆者は谷底から崖頭迄實に壁立二〇〇〇米突仰げば帶狀の天を見得るのみといふ斯かる地形に對しては大きな一の地裂と考へざるを得ないのである。

黑部峽谷は當時の大きな地裂が次第浸蝕されたものと考へるのである。故に鐘釣溫泉を始めとして祖母谷溫泉、黑薙溫泉など其の裂線上に配列されてあるものと見なければならぬ。ずつと下流に宇奈月溫泉、小川溫泉といふのがあるが之は其の地に湧出するのではなくて人工的に上流から引いて來て居る。

（地理教育大正十四年九月號立山連峰縱走理學士石井逸太郎稿）

十、寶達山脈

寶達山（六三七米）を主峰として加越能の國境をなす第三紀層の丘陵は即ち寶達山脈である。南方に重疊たる美濃、飛騨山地の連亙せる北部に之等山地の前山をなしてゐる。基盤は片麻岩、花崗岩等で構成され之に第三紀層が被ふてゐる。其の山麓の東部には礪波平野がよく發達する。西側には加賀の海岸平野發達してゐる。走向は能登半島の鳳至山脈と畧平行し南西より東北に遙か佐渡島に延長する地形を呈する。又吳羽、城山丘陵の走向も大體に於て似てゐる處を見ると第四紀洪積世以後の地殼運動に興味ある問題をなげてゐるやうである。

能登、越中の境である本山脈の東北端部即ち石動山、寶達山の地體は度々陷落する事の多い地である。氷見郡八代村によく斷層による山崩のあるのはそれを暗示してゐる。思ふに本邦地震帶中の但馬、羽咋、

佐渡の國中平野に亘り一線を引かるゝ內側地震帶の一部に相當して居る弱點ではなからうか。

十一、吳羽、城山丘陵

富山市民には春夏秋冬親み深い吳羽、城山の丘陵は飛騨高地の越中平野に終る尖端部で大體に於て南西より北東の走向をとつた一孤丘である。能登、羽咋、邑知潟地溝と略走向が一致してゐる。是の丘陵が越中平野を二分し、古來文化、政治、經濟等に對する自然の境界線であつた事は我が越中史を繙く人のよく知る處である。過去ばかりではない現在に於てもいくらか風俗や氣質、言語、經濟等に於て差異あることを認めるのである。

今五萬分ノ一地形圖或は二萬五千分ノ一地形圖を擴げ吳羽、城山丘陵のあらはれてゐる部分を見ると富山市に面する方は等高線が非常に密であり、反對に西部の平野には等高線が極めて粗である。即ち富山の方は急な崖であることを示して居る。吳羽山（安養坊七六、四米）から城山方面（一四五、三米）を見るときは非常に地形上東西兩面に於て勾配の差異のあることが知られる。此の勾配の緩急あることは面白い地理的の對稱をなしてゐる。即ち富山に面する斜面は主として松等の茂つてゐるのに反し、西の斜面は耕地が多い。即ち階段的農場として桑畑、茶畑、桃畑、甘藷、大根などの野菜類を栽培してゐることが地形圖のみならず實地を踏査しても容易に知り得る。是等の畑に栽培された野菜類は多く富山市に供給してゐるのである。

又冬季スキー場として西部斜面（slope）を利用してゐる。一は地形上適當の斜面であると一は作物關係も副原因をなしてゐるわけであらう。又峠道を見ても東面は稻妻型であるのに西面は比較的直線的で

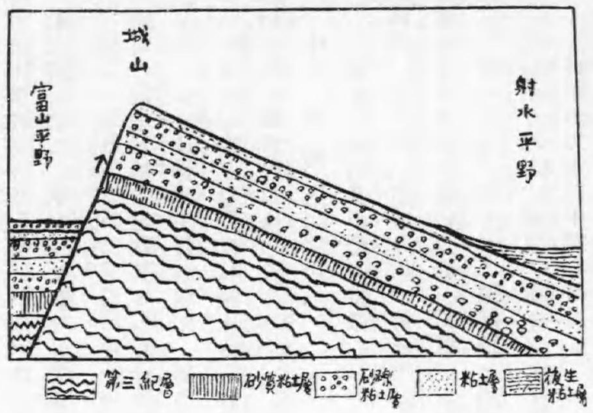
あつて地形圖を眺めて亦知ることの出來るのは西部の山麓に數多の人工的貯水池の横はつてゐることである。

之等の池は全く谷地形を利用して堤を築き谷の水を堰塞し灌漑用に供してゐる。西部の山麓の水田は全く雨水を「堤」に貯水し之で稻作をしてゐるわけである。夏期連日の乾天には用水の不足を來し農民が困難すると聞いてゐる。之は庄川には遙かに遠く神通の水を鳴子よりわげ所謂牛首用水とし百塚村方面から婦負、射水平野の一部に灌漑してゐるも彼の山麓部には其の恩惠に浴することが出來ぬのである。

此の吳羽、城山の丘陵は第四紀洪積世の地層で其の下部は第三紀層である。北陸街道切り通しの地層面、稻葉ガーデン附近丸山の地層面、四方電車軌道の切通し面、城山の所々に露出する面などは此の丘陵の地質を研究するに良い場所であらう。

之等の地層面には下部には第三紀の凝灰質の砂質粘土層があり、上部に至るに從ひ砂質粘土に加ふるに礫を加ふる地層を表はす。此の礫及地層に關し東京帝大の辻村理學士が地理學評論第二卷第八號飛騨山脈北端に於ける斷層崖の一形式なる論文の終に次の如く載

城山假想斷面圖（古川原圖）



せて居る。「吳羽山及城山の孤層は東北に走り東南面する吳羽山斷層崖を以て截斷され其部は約七十度の傾斜を有する軟弱な凝灰及砂岩層で其の浸蝕面上に傾いた砂礫層が乘り變位をうけた舊扇狀地堆積物であることは其のレンズ、エンド、ポケツト成層狀態でも知れる。礫の種類は花崗岩、石英斑岩及灰色硅岩等で粒は徑一糎ー二糎のものが多く常願寺川河床の大岩塊からは現在の神通川程度の緩流の運搬物に相應してゐる」と述べてゐる。

神通川の舊扇狀地を考察するに現今の西笹津附近の開拆された谷口の方面と城山、吳羽山の方向とに一線を引くときは神通川舊扇狀地一部の面影を知ることが出來る。それが洪積世末に傾動(tilting)を受けたもので東面が斯く急勾配に衝上げられ吳羽山、城山となつたものでなからうか。而して其の東緣部を神通川が永い間流れたものでらう。

十二、平野と河川

本縣の河川及平野の特徴

黑部川、早月川、常願寺川、神通川、庄川等は上流部より急に下流部と變つて居る。故に一朝上流部に豪雨あるときは山地の土砂、岩屑、岩塊を平地部に放流することは有史以前以後幾度であつたか枚擧に遑ないであらう。斯くして扇狀地を構成した本縣の諸河川の上流部に於て發電事業を盛ならしめて居るが、之は全く地形、地質、氣候などの恩惠によることである。

吳羽山以東の平野と河川

標式的に上流部は烈しい河蝕地形と下流部は模式的な扇狀地をなす。殊に富山市近傍を構成する平野

は常願寺川と神通川との扇狀地の複合されたものである。

イ、常願寺川

立山々脈西側の水系中最も長大な發育をなしてゐるものは常願寺川である。本山脈の南端上ノ岳より藥師岳、淨土、雄山、別山、大日岳に亘る廣大な地域中の諸水は悉く之に注ぐ。佐良峠に發源する湯川を本流とするよりも眞川の流域は遙かに長大であるから之を本流とするが至當である。

眞川は飛越の國境をなす上ノ岳及太郎山の西側で有峯盆地との間を南北に劃する一脊梁の東側に沿ひ南流して有峯と藥師との間の折立峠附近に至り殆ど東北に折れ水源から約十六粁にして湯川と落合つて居る。

湯川は佐良峠に其の源を發し彌陀ヶ原熔岩臺地の南側立山舊噴火口內壁の諸水を集めたもので水源より約八粁、此の二川合して以下常願寺川となり鍬ヶ崎山と彌陀ヶ原臺地との間を殆ど西流して藤橋に至つて一大支流稱名川を入れる。

稱名川は雄山、別山の西側に發源して室堂、彌陀ヶ原の臺地と大日岳、早乙岳との間を西流し熔岩臺地の絕壁に稱名瀧となつて藤橋附近に至り水源より約十六粁にして本流に落合つて居る。

本流は是より愈々河域と水量とを增し西流すること約四粁和田村に至り有峯盆地から來る前川（和田川）を合せ中地山に於て小口川を入れ次第に西北に傾き岩峅村と上瀧町との間の新川橋に至つて初めて平原に出るのである。此の附近より多くの小分流を岐ち扇狀に展開し、中新川、上新川兩郡の田野を潤し本流は濱黑崎に至つて富山灣に注ぐ。水源より約五十二粁である。

立山附近の脆弱なる火山噴出物が水蝕を受けて幾多の豪雨ある毎に土砂岩石を崩壞し猛烈に之が運搬を逞うした。殊に湯川の流域は甚だしい。藤橋の對岸粟巢野は河床から百二三十米の高位置にあり之に數段の相平行する段丘を認める。其の東部に露出する崩壞壁を見るに砂礫の堆積より成り河成層であることが明かである。

常願寺川の流した土砂により富山平野が構成された。それは富山近傍の五萬分の一地形圖を見るとコントルが半圓狀に並行し谷の出口に密であり下流に緩かであることから分る。此の扇狀地には田園よく開け藩政時代以後の治水灌漑の事業宜敷きを得以後人口稠密な地方となつたわけであらう。標式的な一大扇狀地であることは吳羽山上で眺めた時一目してよく分るのである。上流部に於て日電、縣營に係る發電事業が盛んに行はれてゐる。

常願寺川と灌漑

中新川方面に利田三郷用水、高野三千俵用水、大森用水、釜淵秋ヶ島用水等あり、上新川方面に常西用水として太田、清水等の用水として分れ網狀を呈して田野を潤してゐる。二萬分ノ一富山近傍地形圖を見ると能く水路の分布されてゐるのに驚かされる。富山市は驛前より南富山に至る電車線路を境として東部一帶に良い飲料水を得るのであるが之は茲に斷層があつて西側は一段低く滯水層が横はつて居るためであらう。神通川の河成堆積層を浸透して地盤の不透水層にそひ湧出する地帶である。故に此の地帶に鑿井をなし豊富な良い飲料水が求められてゐる。大泉町、清水町、泉町等の地名によつても良い泉地の意味をあらはしてゐる。富山市の東南郊太田村の的場の清水は豊富な泉地をなしてゐる。又公文名

の清水等は前述の神通川の水が伏流して後顯れるのであらう。又大泉以南の鵜川の崖より盛んに清水の溢れる橋を見ても同理であると信ずる。

富山市の東南部に水車工場（精米、製粉）の電力を利用されなかつた以前は唯一の重要な動力であつた事は地理學上面白い景觀である。

ロ、神通川

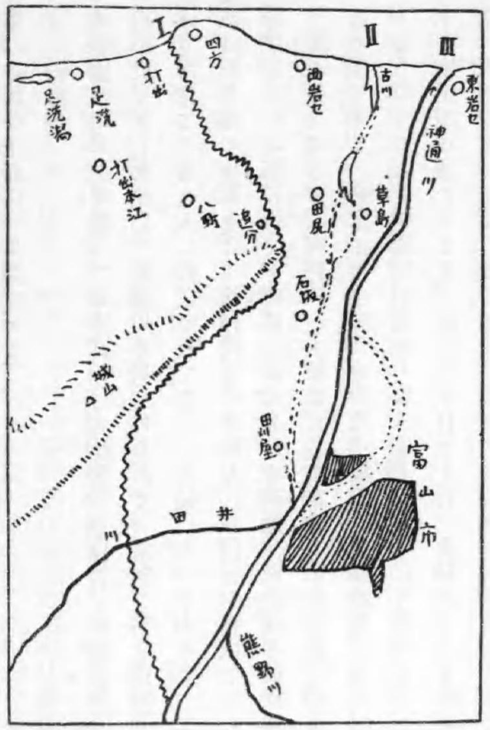
飛驒國位山に源を發してゐる宮川は古生層、花崗岩、片麻岩帶を流れ一大支流高原川を本縣と岐阜縣の境に於て合し北流して神通川と名づけられる。常願寺川と比較して流域遙かに廣く水量も遙かに多い故水電事業としても大に囑望されてゐる。本縣に入つて中生層（手取統）花崗岩の山地を浸蝕して幼年期或は壯年期の地貌を作り楡原附近に明瞭な河成段丘を構成してゐる。西笹津附近から平原に出で大澤野村字岩木の北部に於て一時は二派に分れ中神通、西神通の島狀地を形成し成子で合して北流し熊野川の支流を併せてゐる。熊野川が上流部に於て常願寺の舊河跡と思はれる地に流路を採り流域を擴大しつゝある樣である。亦富山市主要部を南北に縱貫し幾多網狀に分布してゐる下水路はその支流土川から引いてゐるのである。神通川が北流し新大橋上流左岸に井田川を合せて益々水量を增加し北流して東岩瀬に至り富山灣に注いでゐる。流程凡そ百五十粁、本縣内を六十粁流走してゐる。井田川の支流山田川は牛嶽（九八七米）山下に發し途中山田村に山田温泉を湧出して居ることは庄川流域の大牧、祖山等の白山火山系に屬するものでなからうか。

ハ、神通川下流の流路變遷

越中史、四方町誌等に記してゐる有史以來の口碑、傳說を辿り藩政時代の古地圖、二萬分の一地形圖、四方、吳羽の兩圖幅を參照して按ずるに興味ある問題を藏してゐる。以下の時期は吳羽城山の丘陵形成後のことである。

第一期の流路

吳羽城山の弧立するや神通の下流に於ける流路は城生より北々東の流路を取つて、現在の井田川の下流を流れ吳羽城山斷層崖下に沿ひ、幾多分流して現在の東岩瀨、西岩瀨、四方、打出濱一帶に擴り所謂古の「石瀨野」と稱せられる地方を流れたのである。岩瀨あたりは大伴家持が越中國司であつた頃、萩の名所であつた。尙上古は「水口」と稱して越中唯一の運海地であつたと傳へてゐる。當時の海岸線は現在よりも複雜であつて打出村と四方町の間に主に神通の水が流れてゐたらしい。



第二期の流路

第一期以後幾多の變遷はあつたであらうが四方町沿革誌に「天正八年神通川洪水の爲め河流に變化を來し現今「古川」と稱するのは當時の本流の跡なり。岩瀨と稱する地は河口の西と東にあつて東西岩瀨町を形成し云々」と第二に今の五艘、田刈屋、宮尾、金山新、古川の流路をとつた。

第三期の流路

幾度か洪水の爲め本流は吳羽丘陵より離れ現今の流路をとり市の西北に一種の蛇曲（meander）の流路を示して東岩瀨に近く寄つて流れた。しかし此の蛇曲は一朝洪水時に富山市始め近傍に非常な水害を及ぼしたのであつたが明治三十六年馳駒線開鑿以來汎濫の憂も少くなつた。

ニ、早月川と扇狀地

劍嶽の西麓に發し片麻岩の山地を西方に流れ後西北に轉じ第三紀層の丘陵地に入り遂に西北々に向ひ富山灣に注ぐ。小規模ながら模型的な扇狀地をなしてゐる。上流に伊折の發電所があり此の川沿に劍嶽登山の近路がある。

ホ、片貝川

毛勝山（二二四一四米）、猫又山（二三七八米）に發源する片麻岩の山岳地方を流れ第三紀の丘陵地を過ぎ平野に出で魚津町の北方約四粁の濱に盡くる。流程三十二粁。

ヘ、黑部川と扇狀地

本峽谷については先に述べた本流は鷲羽岳に發源して北流し後西北に轉じ黑雉川を入れ愛本に於て俄に展開し平野に出る。流域は花崗岩、片麻岩の地を流れ水色淸い。愛本より下流は最も形正しい單純な

扇狀の沖積平野である。五萬分ノ一地形圖に等高線を明瞭にすると見事に扇の形態をあらはす。現扇狀地にも明らかに斷層線があり又舊扇狀地にも斷層線を發見する。即ち東側は複斷層をなしてゐる。黑部川の扇狀地の頂點は百三十米にある。愛本より宇奈月に至る間に現谷底より百五十米内外の高所に段丘を見又諸所に礫層の堆積を見る。之等は舊河床の一部である。

吳山以西の平野と河川

所謂礪波平野と射水平野とを主なるものとする。礪波平野は能登の邑知潟、羽咋の地溝と平行してゐる事は著しい特徴である。それらを流るゝ庄川、小矢部川の二川は主なるもので著しいのは射水平野に大なる河川のない事と海邊に放生津潟、足洗潟を持つてゐることである。

イ、庄　川

射水川とも稱してゐる。上流では白川と稱し飛驒山脈を南より北に流れ水源より四十粁にして本縣に入る。飛驒地方の河成段丘上に所謂「白川鄕」がある。山間僻地である爲めに他との交通不便で其の爲め日本では稀に見る大家族制の部落として名高い。筆者は昨夏飛驒の高山から天生峠を越して鳩の谷へ出たが此處から何れの町へ出るにも十里内外の山路を迹らなくては困難である。

本縣に流れ込んでから先づ片麻岩及第三紀の地帶を過ぎ迂餘曲折甚しく又北流して正南の大支流利賀川を右岸より入れて愈々平原に出で井波町の傍を過ぎ數多の溝渠を分流する。大門に至り牛嶽附近の丘陵より來る和田川を合せて新湊、六渡寺間の海に注ぐ小矢部川と同一の河口であつたが大正元年庄川上流の土砂の崩壞甚しく隨つて河口に堆積を防ぐ爲め新水路を開鑿した。

ロ、庄川の舊流路

五萬分ノ一地形圖城端、石動の兩圖幅を開き扇狀地の發達を見るに福野より福岡に向ひ小矢部川の現河床を共にして流れてゐるものと推斷せなくてはならぬ。尙詳細なる事は實地踏査の研究を待つ。

ハ、小矢部川

大門山、山毛欅尾峠附近に發源する本縣の西境連嶺の東麓に沿ひて北流し礪波平野に出る數多の細流を合して福光驛を過ぎ益々北流して石動町の北を流れ一時北陸街道に沿ひ東北に折れ伏木港口をなす。

ニ、庄川と神通川との間の所謂射水平野の成因

確たる文献、或は實地の研究物は不幸にして見當らない。詳細な研究を得度いものである。

1、貝塚の分布より

古代の海岸線を想像することは難くない。百塚、長岡附近（北代の村社白髭明神の境内及社後）の貝塚、黑川村に貝塚があり其の他老田村、金山村、古澤村に分布があれば海岸の隆起せるものであることが知り得る。又下村に食鹽を含む井戸ありといふも地質上論ずるに價値なきものか。

2、沼澤地の埋沒された平野でなからうか

現在の放生津潟は往時は小杉町附近まで擴大してゐた。古は「越の湖」と稱せられた。それに並んで本江村の足洗潟も古は連續してゐたものと云へる。二萬分ノ一の地形圖に二米半以下の地帶は實に廣い。後兩潟が分離したものである。然るに池多村、金山村の洪積層を流るゝ下條川、鍛治川等の泥土を沈積して放生津潟を縮小して行つた。現在片口村一帶の地下深くを掘ると往時の水邊に生育してゐた葦等が

恰も樺太に於ける Tundra 地帶にあるやうな層をなして出るといふ。すると一種の埋沒された平野ではなからうか。

ホ、氷見の海岸平野

第三紀層を基盤とし洪積層より成る丘陵が海岸に迫つて一帶に斷崖をなせる處が多い。砂質の土壤に桑など栽培するのは本縣に於て特種の地理區をなしてゐるやうである。十二町潟上石川は羽咋の地溝帶に平行された小地溝にあらはれた現象でなからうか。長大なる河川もなく灌漑用地として大なるものもなく夏期の旱天時には水田に用水の不足勝であるのは平野の背後に湖沼もなく高峻な山地もなく從つて飛驒山脈に於けるが如く雪溪もない。それらは地形上から說明し得る。

十三、本縣の主なる溫泉

溫泉は溫泉線と稱する一の地體構造線に沿ふて湧出するものである。本縣の溫泉も亦然りで、或は斷層線或は拆裂線に沿ふて配列されおるのである。今其の主要なるものを擧ぐれは左の如くである。

溫泉の分類としては其の湧出地の年平均溫度以上のものと定義されてゐる。

泉名	泉質	溫度	地質
小川（新湯）	炭酸	五〇度	小川ノ上流
小川（舊湯）	同	四七度	侏羅紀層流絞岩の裂罅
西鐘釣	同	四九度	黑部の上流西岸花崗岩と石灰岩との接觸部
小黑部	硫黃	七〇度	
黑薙	炭酸	四二度	黑薙川の花崗岩の裂罅
出枝原	硫黃	四九度	大鳶山麓輝石安山岩
立山溫泉	鹽類	五六度	安山岩
山田	鹽類	四五度	山田川岸頭第三紀層礫岩の裂罅
須山西明寺	炭酸	一六度	第三紀層
祖山	炭酸	四〇度—六二度	庄川片麻岩を貫く玢岩脈に沿ふ
大牧	鹽類	四〇度	

十四、海岸地形

富山灣には一千米以上の深海が灣入して小なる出入が割合に少いことゝ、島嶼の尠いことが特徵である。只寶達山脈の富山灣に盡くる處はリヤス型を示して居る。唐島は第三紀層の海蝕に抗した名殘であらう。氷見町から雨晴に至る間は砂濱をなし二上山脈の末端は海に迫り上部の洪積層は波浪に洗ひ流され下部の第三紀砂岩層が殘り波蝕に抗して居る。男島、女島等の小島は先の砂岩によつて構成されてゐる。新湊から堀岡に至る砂濱は內に放生津潟を形成してゐる。新湊より滑川に至る海岸線は東西を示し一般に砂濱である。口碑、傳說によると歷史時代に入り海浸が年々增し往時の海岸部落が今は沖の海底となつてゐると傳へられてゐる。

然し之は陸塊運動のためで本島に於ける日本海岸の沈降帶の一部と見るが至當であらう。

早月川の口から片貝川の河口に至る迄畧半圓狀の海岸は黑部デルタの成長を明瞭に示してゐる。泊町

の笹川、宮崎の海岸は第三紀層の丘陵海に面しそれ以東の海岸地形は飛騨山脈の北端が日本海に盡くる斷崖絶壁で山骨が直ちに海に迫り昔北陸道旅行者の險難親不知となつてゐる。

第三節　海　洋

主として海底地形に止める。詳細なる富山灣に關する文献を缺くも「地球」第三卷第六號、同第四卷第一號に連載された水路要報第四年第三號及第四號所載の小倉伸吉氏「日本海の深さに就いて」の拔萃文を更に筆者は拔萃した。それと海軍水路部發行の「能登半島」の海圖に力を得たことが多い。將來富山灣に關する文献の生れることを鶴首して待つ次第である。

一、日本海測量史

一八七九年獨逸船ルイゼ號が長崎から浦鹽斯德に至る間を錘測した事がある。

一九二四年我國では津輕海峽―清津―舞鶴―日本海の中部―津輕海峽に至る間特務艦大和の錘測があつた。

二、富山灣測量史

明治二十年海軍少佐磯野健等が測量した。後明治二十五年海軍少佐加藤重成等が伏木以東を測量した。伏木錨地は大正二年海軍水路部技師飯塚太郎の測量により精査された。

三、日　本　海

大正十三年特務艦大和は日本海を横斷した三線上で測深したので日本海底の形が畧察せられる樣になつた。然し日本の北半は我が領土沿岸附近を除く外海底の形が殆ど知られてゐない。中央部に三千米以上の深さがあるが他の海とは何れも二百米未滿の淺い海峽で通じてゐる。最も著しい形は畧中央に五百米未滿（最深四三三米）の淺所があり、南方隱岐と一千五百米未滿の海膨が續いてゐる。此の流所の南に三千米以上の海淵もあるが、淺所が能登半島と淺い海底によつて連絡してゐるや否やは明かでない。朝鮮の海岸特に北部では急傾斜をなし本州の沿岸は比較的緩である。最深點は奥尻島の南西約六十浬の三七一二米である。佐渡の北には深さ二〇〇米未滿の堆が四つあつて海底の形が複雜であるが西方の三つの堆は四〇〇米未滿の深さで南北に佐渡と連絡し此等の堆と其の東にある堆の間には六〇〇米以上の海溝が北端附近に達してゐる。

四、所謂能佐海溝（小川博士の日本地圖帖による）

佐渡の北西側及能登の北側では一千米の等深線は岸から可なりに遠いが富山灣に向つて深く入り込んでゐる。此の能佐海溝は能登から佐渡に續く山脈を深く横斷してゐるが富山灣に入つて深い部分は山脈の方向に略併走してゐる。

五、富山灣の海底

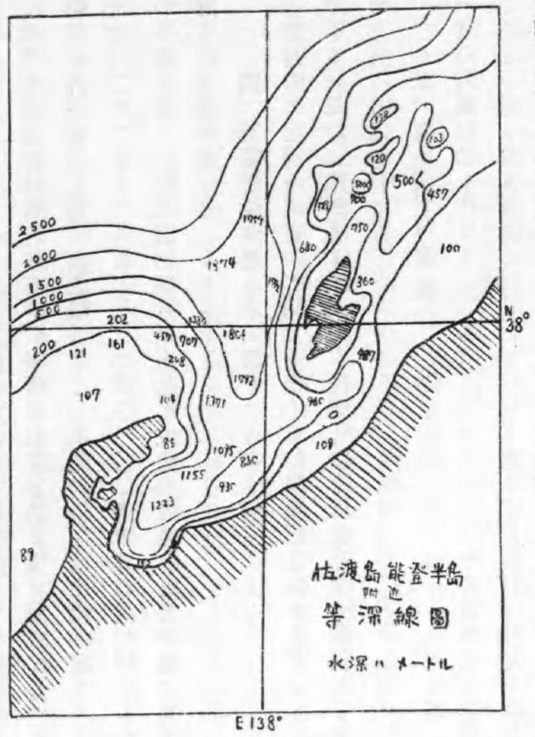
其の南部を除く外は二〇〇米の深さから八〇〇米の深さ迄は急斜し、それより深い部分の海底は平坦である。灣は西側海底は急斜してゐる。例へば七尾灣口附近では深二〇〇米―八〇〇米の平均傾斜は十五度に達する。

灣の南側は比較的遠淺で且海底の有樣が可なり複雜である。其の最も著しいのは射水河口に向つて入

込んでゐる海谷と神通川口から沖合に向つて突き出した海嶺とである。神通川から吐出した砂泥で出來た觀を呈してゐるが恐らくさうでなくて元來の海嶺であらう。上記した樣に富山灣は可なり深いに拘らず能登の北側及西側は遠淺で、二〇〇米の等深線は距岸約二十五浬の沖にある。

海底の形から見れば富山灣は相模灘などゝ同樣に陷沒によつて出來たものと思はれる。

以上水路要報の拔萃及海圖から得たことを纏めたものであるが、深底の物質及海流、沿岸流等の詳細なる文献も得度いものであるが本章では單に地形の一端を載せたに過ぎない。



第四節　北陸地方の氣候

一、位　置

日本海に面する地方を我國に於ては裏日本と稱し、其の裏日本中、新潟、富山、石川、福井の四縣を總括して特に北陸地方といつて居る。其の位置凡そ北緯三十六度より三十八度、東經百三十六度より百三十九度の間に跨る日本列島の畧中部であつて、而も溫帶の中央部を占めて居る。

二、地　形

地形は畧蝙蝠の翼を擴げたるが如く一般に內地は屏風を立てたやうで富士、越後、三國、飛驒、寶達等の山脈相連りて高く海岸に向つて斜下し河川亦南より北に流れ從つて其等下流は海岸に於て平野を形成して居る。即ち信濃川、阿賀川等が合して廣大なる越後平野を、亦黑部、常願寺、神通川等は越中平野を、犀川、手取川は石川平野を、又九頭龍、日野等の河川が合して福井平野を形成して居る。而して之等は皆沖積層である。海岸は富山、石川、福井の一部分を除きては極めて單調で良港に乏しく唯富山灣に伏木、七尾灣に七尾、敦賀灣に敦賀等の港を有するのみ。新潟、石川兩縣の海岸には砂丘がよく發達して居る。地質は主として第三紀層と第四紀沖積層とで、山地の岩石は花崗岩、安山岩、輝石等である。

三、氣候の概畧

北陸地方は氣候の惡いので有名である。即ち十一月三日の明治節を境として天候殆ど晴れ渡る日とてはなく曇天か雨雲天かである。太陽の顏を見ること少いのである。此の影響は家屋の上に人の氣質の上に、或は服裝その他全般の上にあらはれてゐるのである。

1、氣　溫

	年平均	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
福井	13.4	2.4	2.6	5.6	11.6	16.3	20.6	24.8	25.9	21.6	15.2	9.9	4.8
敦賀	14.1	3.9	4.0	6.5	11.9	16.0	20.4	75.2	25.8	22.1	16.2	00.1	6.3
金澤	13.2	2.5	2.4	5.3	1.11	15.5	20.0	24.1	25.5	51.5	15.4	10.1	5.1
伏木	13.1	2.2	2.1	5.2	10.6	15.1	19.7	24.1	25.7	21.7	15.7	10.0	4.6
新潟	12.6	1.4	1.5	4.4	10.3	14.8	19.4	23.7	65.6	21.4	15.2	9.5	4.1

右表によりて知らるゝ如く普通一般の氣溫は夏期に於て十七度より二十六度、冬期に於て一度より四度の間にある。寒暑の差は著しく大なりとはいはれない。伏木測候所に於ける記錄を見るに最低極は零點下十二度一（明治三十七年一月二十七日）最高極は三十七度六（大正七年七月二十七日）である。而して年内に於て溫度の變化の最も急激なるは九月より十月に移る間及十一月より十二月に移る間に六度以上の月平均差を以て下り三月から四月に移る際に五度内外の差を以て上るにある。差の最も緩漫なるは一月より二月への殆ど差を認めざる又七月八月に於て其の差一、二度を出でざるが如き之である。

2、氣　壓

平均氣壓は新潟の七六一、一耗を除きては他は殆ど同樣である。北陸地方に影響する低氣壓の著しきものは所謂二百十日前後南海岸を襲ひ近畿地方を通過して當地方を掠め日本海に出づるもので時によりては之が爲め蒙る農作物の害は莫大なものである。此の外秋冬の候琉球附近より朝鮮海峽を過ぎ日本海を一掃して本州地方を荒し以て津輕海峽に出づるもの竝に冬春より初夏に亘つて頻次支那東海の北部に發生し朝鮮海峽より日本海の沿岸を通過し本地方に至りて南西の暖風を起し且豪雨を降らす。

3、風

風向は概して南西若くは西北で冬季北或は北西風の強いのは言ふ迄もないが、富山地方一局部より見れば北風は却つて少いやうである。

風力は新潟地方に於て最も强烈であつて平均四、九秒米、之より南西に向ふに從つて次第に微弱となり金澤の三、二秒米を以て最少とす。而して一般に沿海平原に强く爲めに此の地方にて祝融の災にかゝる事が非常に多い。

4、濕　度

本地方は濕度稍大なる地方で各地の年平均濕度は七九乃至八〇で概して夏季冬季が最大で春季之に次ぎ秋季最も小である。

5、降　水　量

對馬暖流の影響により一般に此の地方は降雨量多く特に福井縣に於て最も多く石川、富山は之に次いで降雨量の多いので知れる。表日本地方名古屋東京附近の快晴日數五十六日なるに反して裏日本地方特に北陸地方にありては快晴日數僅かに二十三日で常に陰鬱且雨雪が多い。降雪は新潟縣に於て十一月下旬より翌年四月中旬迄他は凡そ十二月中旬より三月中旬迄で雨雪日數の最多なるは一月で三十一日中殆

ど全部即ち二十六七日は多少の降水あらざるは無く十二月、二月、十一月之に次ぐ。

之を要するに北陸地方の一般氣候は大陸と日本海の感化を受け冬期は雨雪多く夏期は炎熱比較的に甚だしい。而して對馬海流は裏日本に影響すること著しく殊に冬季の如き大陸より來る西北風は此の濕氣に富める暖流の上を吹き夥しき降雪恐らく降雪量は世界一かも知れぬ迄に及び、氣溫は大に之が爲めに調節せられて餘程寒威を輕減せらるゝやうである。

累年月別降水量

		1	2	3	4	5	6	7	8	6	10	11	12	年
伏木	自明治十九年至大正十四年平均	249.6	166.9	142.4	126.1	113.5	151.0	191.9	144.8	213.2	160.5	213.2	322.1	2195.1
	昭和三年	252	166	142	127	112	148	191	146	215	162	212	322	2194
金澤	同	274	188	167	161	143	178	204	162	244	207	269	354	2549
福井	同	283	200	161	145	142	181	195	145	232	176	221	342	2421
敦賀	同	258	173	157	138	142	174	166	168	239	183	225	332	2354
新潟	同	194	128	110	102	91	124	160	121	190	163	195	231	1810

第二章　人文地理資料

第一節　住民

一、富山人の勤儉力行生活

富山人は一般に勤儉力行を以て生活のモットーとしてゐる。啻に消極的に諸事を節約するのみならず積極的に奮闘努力する特質がある。

即ち富山では男でも女でも子供でも皆競ふて稼ぐのである。男子が進んで勞働に從事することは言ふ迄もないが、富山では女工或はその他の女勞働者の多い事は注目に價する。子供の稼ぐことも亦富山の特性である。早朝子供の花賣り其の他氷賣り納豆賣りなど其の原因は主として地理的事情に基くのである。

地理的事情とは何ぞ、第一、一年の約半ばは雪の爲めに野外の勞働困難であること。第二、過去に於て水難、火難の厄に頻々遭遇せることである。

是等の恐るべき災難に堪え忍ぶ中に自ら困苦缺乏に耐える精神が培養せられたので決して偶然ではない。

二、富山人の精神生活

富山人の精神生活は堅忍不拔性を中樞として居る根氣が強い粘り強い辛棒強い如何なる艱難にも堪え

忍ぶ不撓不屈の精神がある。

富山賣藥が全國津々浦々に迄普及して居るのは賣藥行商人の辛苦の結晶であり斯の辛苦が富山人の意志を典型的に鍛錬したのである。

斯くして經濟的産業方面に突進したのである。然し其の反面に於て學問を顧みないやうになつたのである。

過去の富山人は學問に對し理解が薄弱であり隨つて教育にも理解が少ない古來の學者を見ても其の數僅かに蟹江義丸、岡田正之、故高峰讓吉、石川日出鶴丸等輩出するに過ぎぬ。

三、富山人の品格

古來藩制時代、藩士として賭博に耽る者多く其の風尚、品格に於て町人百姓に劣るものもあつた斯樣な祖先、先輩を戴く富山人は、やはり此の點に大に缺くる嫌がある。現在富山より一流の國土、政治家、行政官の顯れないのも主として斯の種の事情に基くのである。

四、富山人の經濟生活

富山人は學問、武藝に純眞的の興味なく隨つて士君子の風尚、品位を欠き治國經倫の才能に乏しきも其の反面經濟的産業方面に深奥の興味を持つて居る。

水難火難頻りに來る富山藩に於て産業奬勵が主要なる傳統的政策となつたのである。所謂商人肌合となつたのである。安田善次郎、淺野總一郎の二巨頭は富山人の肌合を典型的に代表せるものである。富山人の精粹は茲にある。富山人は進取の氣象に富み進歩發展性を有する。

五、富山人の團結性

富山人の下層級には朋黨比周の性情がある。藩政時代よりグルになつて多數の力を藉り是が非でも押し通さうとする根性がある。大正七年勃發せる全國的米騒動は其の端を滑川の米騒動に發した事は周知の事實であり、近くは電氣爭議でも明らかである。しかし先輩後輩の連絡がついてゐない。之が富山人の官界に地盤を固め得ない理由で一に此の事情に基くのである。

六、富山人の宗教生活

北國は總べて地理的關係より哲學や宗教に深刻の興味を有す。一體に北國人は共通的に哲學的宗教的深刻味が日常生活に横溢してゐる。

七、富山人の人情

富山人は態度心情共に率直素朴である。其の現はるゝ言葉に於て見るも粗雜であり、恰も方言訛言の積集の如き感がある。しかし深く交際すると非常に親切味があり、温情味がある。之等はたしかに此の地方の氣候が人の性質に影響を及ぼして居るものと思はれる。

第二節　産　業

一、産業全般

本縣の生産總額は一億七千八百餘萬圓であつて、工産の一億二百萬圓を第一とし、農産の六千百七十七萬圓之に亞ぎ、水産、林産、畜産、鑛産の順位である。

物産の主なるものは米の四千七百餘萬圓を第一とし、賣藥及織物之に亞ぐ、何れも一千萬圓以上の産額で其の他に綿絲紡績、清酒、蠶絲、製造肥料、藁工品、西洋紙、麻絲紡績、銅器、炭化石灰、漆器等亦相當の生産がある就中銅器、漆器は古來特有の物産で其の名があらはれて居る。本縣は置縣以來農産を主位としてゐたが豊富なる電力の發作に伴ひ、大正十年以來益々工業進展の傾向を現はし今は農産を凌駕して其の位置を換へたが如きは世運の一進轉である。

今昭和元年度に於ける生産額は百分比例であらはすと、工業は五七、三％　農産三四、七％　水産四、七％　林産一、二％　畜産一、一％　鑛産〇、九％　である。

産業は富山高岡の兩市は勿論近來は魚津町、城端町、井波町、福野町、福光町、戸出町の如き工業化して來た。而して工産物に就きて生産狀態を表示すれば左の如くである。

	製造戸數	職工數	價格
賣藥	一四〇一	三四〇四	二七、一〇七、一七三円
織物 絹織物	二二七〇	八三六三	一四、〇三七、〇一四
織物 綿織物			五、一八六、三六〇
織物 其ノ他			四、〇七〇、三六八
清酒	一二二	一、八三一	三、五二九、七五八
製造肥料			三、四六一、一六〇
綿絲紡績	二		
西洋紙	一		
蠶絲	二、四四三	三、七四〇	三、三八〇、〇二〇
藁製品	五三、九四六		二、九六七、五五二
製材	二四一	七六二	二、六八二、〇九五
銅器類	四六二	一、四三九	二、五〇三、四一三
木製品	一六五一	二、五〇〇	二、三八七、一一一

此の外工業用藥品、醬酒、麻絲紡績、板紙、製綿、菓子、漆器、炭化石灰、バルプ、瓦及土管等は何れも百萬圓以上の生産額を有して居る。

次ぎに農産に就きて見るに其の大部分は米で、作付反別七九、七〇七町歩價格は四百七十四萬圓の多きに及び、之に次ぎて綠肥作物が八五八二町歩の廣きに及んでゐるが價格は四百萬圓、第三位は桑葉で百二十二萬圓、次は大根、里芋、大豆、甘藷、西瓜、茄子、馬鈴薯等何れも二十萬圓以上の生産額である。

水産は鰛漁を以て第一位とす。即ち百二十五萬圓、鰤六十三萬圓、烏賊三十四萬圓といふ順序で此の外鰺、鯛、鰺、鰐、鮪の類である。

林産に就いて見るに、森林全面積は一七六九四六町歩、その中八〇九三九町歩は國有林、六二一五一六町歩は私有、之に次ぎて三三一〇八町歩は公有面積である。その他三八二町歩の社寺有がある。林産物としては用材、薪炭材、竹材、その他木炭、柴草等である。

畜産としては家畜で馬一萬頭に次いで牛千四百頭、豚千二百頭、山羊百四十四頭、緬羊三十七頭である。家禽には鷄甚だ多く、飼養戸數は三二一三九戸價格四十三萬圓に上る。鶩は僅かに二千圓位の少額で

ある。

此の外に牛乳二五萬圓、牛肉一五萬圓馬及豚一萬圓餘である。

鑛產には滿俺鐵、黑鉛、亞鉛鑛等でその產額總計百六十九萬圓に上つてゐる。

二、賣　藥　業

(イ)富山賣藥ノ概要

富山賣藥は大和賣藥と共に我が國に於ける配置賣藥の二大中心として夙に知られ累年其の產額を增加して今や年額二千二百萬圓を算して本縣主要工產物の第一位を占め、所謂賣藥王國の名を致すやうになつた。

(ロ)富山賣藥の起源と沿革

抑も富山賣藥は靈元天皇の天和三年備前の醫師萬代常閑翁が其の家傳の秘方たる反魂丹を富山藩主二世前田正甫公に献じた處、東山天皇の元祿三年に至り公が幕府に柳營中反魂丹を以て某侯の急病を救はれた時列座の諸侯皆其の靈効に感じ普く需要の便を開かれんことを要請するに及び、遂に公は之を承引して藥種商松井源右衛門に調製させ八重崎屋源六をして行商させられたのが其の始めである。爾來二百三十餘年間幾多の賣藥禁壓時代を經て今日の隆昌を來すに至つた。後世賣藥家相謀りて妙國寺境內に碑を建てた。明治二十三年に行商先祖八重崎屋源六の碑も同境內に建てた。尙寺內には常閑翁及源六の木像が安置されてある。

而かも近時斯業の發展と共に益々之が研究改良に努力し今や之が施設機關も漸く完備の域に達し、教育機關としては官立富山藥學專門學校市立富山藥學校を數へ、尙指導機關としては賣藥試驗場、處方研究會、藥學講習會、藥草園等の施設と相俟つて其の發展に資せんとして居る。

斯くして斯道の大家合同の研究指導と完備せる施設の下に製造せられ、而も一般藥學の知識ある行商員によりて取扱及販賣せられる點は實に富山賣藥の誇りである。行商人は約九千人、縣全體八十三萬人に對して一、八%の多きに及んで居る。而して其の產地は縣下一般に跨ると雖も、富山市賣藥は實に其の濫觴で且其の產額も第一位を占め、次に中新川郡、婦負郡、射水郡、上新川郡、東礪波郡、高岡市、下新川郡、西礪波郡、氷見郡の順序である。

	內地賣藥價格	輸出賣藥價格	計
上新川郡	六五五、八三三円	一、六五〇円	六五七、四八三円
中新川郡	七、八九二、一四〇	二三、〇五〇	七、九一五、一九〇
下新川郡	二八、五五〇		二八、五五〇
婦負郡	二、〇七六、五一三	四七、八一六	二、一二四、三二九
射水郡	一、三五九、三一六	二〇、五〇〇	一、三七九、八一六
氷見郡	四、〇九〇		四、〇九〇
東礪波郡	六六七、七一〇		六六七、七一〇
西礪波郡	二四、九九〇		二四、九九〇
富山市	八、四一九、八六五	二一三、二一九	八、六三三、〇八四

高岡市	三二一、一八〇	三〇六、二三五	職工 男	職工 女	計	三二一、一八〇
合計	二一、四五〇、一八七					二一、七五六、四二二
	行商人					
上新川郡	六七六		一四三	五一	九四	
中新川郡	二、二〇六		二三六	一、二九九	一、五三五	
下新川郡	四二		三五	九	四四	
婦負郡	九三九		三五	一〇六	一四一	
射水郡	一、〇一六		六九	六七	一三六	
水見郡	八		一〇	九	一九	
東礪波郡	二八九		五四	三九	九三	
西礪波郡	九九		四七	九	五六	
富山市	三、七五〇		一七一	五五〇	七二一	
高岡市	四七		四九	二一	七〇	
合計	九、〇七二		七四九	二、一六〇	二、九〇九	

（八）富山市ノ賣藥

本市の賣藥は逐年增加を來し昭和二年には生產額八百六十三萬圓となり、其の中內地賣藥は八百四十一萬圓、輸出賣藥は二十一萬圓を算してゐる。之が製造會社は

株式會社廣貫堂……梅澤町
株式會社師天堂……荒町
富山藥業株式會社……星井町
富山藥劑株式會社……總曲輪
富山製藥株式會社……山室村清水
株式會社富山精壽堂……山王町
富山賣藥盛貫堂……古鍛冶町

等は主なるもの個人營業者は四百七十五戶に及び之が製藥に從事する職工は約七百二十一名で、行商員は三千七百五十名の多きに達して居る。而して其の行商方面は近畿を第一位とし關東、九州、東北、東海道、中國、北陸、北海道、四國地方等の內地は勿論其の他臺灣、樺太、朝鮮等の移出を初め尙支那、ブラジル、布哇等にも輸出せられてゐる。而して現今は更に歐米品と拮抗すべく資本金壹萬圓の國際製藥株式會社を設立し近くメキシコ方面にも雄飛して其の新販路を求めんとし富山賣藥は將に世界的に名を致すと共に我が經濟界にも亦多大の貢獻を齎らさんとしつゝある模樣である。

吾人は富山賣藥の隆盛に至りし地理的原因を考察するに氣候の關係甚だ大なるべきを思ふ。即ち十二月より三月に至る約 1/3 年は雪に閉ぢ籠められて田野に於ける生活が出來ない爲め、自ら室內の仕事を求むるか或は他の地方に出なければならないのは自然の情勢である。

別に製藥の原料を此の地に產するといふが如き特別の地理的恩惠に浴して居るのでもなく、寧ろ自然的氣候不順の致す處で人は之を避けんとして發達したものと見るが至當である。

若し自然的に惠まれ居たらんには例へ二代藩主正甫公の奬勵ありたりとはいへ今日迄に繼續發達は來さなかつたであらう。思ふて玆に至れば自然と產業との關係の如何に密なるかに氣付くのである。

（二）廣　貫　堂

富山市梅澤町にある明治九年三月に創立した一大賣藥團體で目下株式會社となり其の名海の內外に著はれ如何なる山村僻地でも行き亘つて居る。工場には製丸機械、製粉機械、印刷機等を備へ規模の宏大、設備の完全は來觀者の歎賞する處である。其の販路も支那、安南、爪哇、印度から遠く南洋諸島に迄輸出するの盛況であつて、明治四十二年十月一日東宮殿下（大正天皇）の行啓あり、親しく製藥の狀況を台覽あらせられた。當時御座所を新築し記念として淸凉反魂丹を新製した。大正十三年五月六日秩父宮殿下立山御登攀の途次御成になり製藥狀況を御巡覽あそばさるゝの光榮に浴した。

第三節　動力及交通

一、日本に於ける水力電氣の發達

水力電氣は今日は白炭 White coal ともいつて石炭石油に劣らない重要な動力資源である。元來水力は天然の動力として早くから人類の利用したもので、近世迄西洋では製粉紡績等に我國では精米製絲等に利用されたもので今も我が國の山間には水力を直接に用ふる精米所がある。然し西洋では石炭による蒸汽力が盛んに使用されてから水力利用は衰へた然るにそれが水力を以て Turbin water wheel を動かし水力を電力に換へ之を發電所から消費地迄傳導し得るやうになつてから再び盛んに用ひらるゝ事になり今日では發電所から遠く二百哩も隔つ工場迄傳導し得るやうになつたので其の動力は恰も商品同樣に販賣され水力資源の多少は石炭の石油と同樣に一國商工業の盛衰を決定することになつた。

しかし水力資源の多少は全く地理的原因によつて左右さるゝものであつて、特に地形と氣候とによることは勿論である。水力は瀧を利用するものであるから其の力は流水量と落差との相乘積に比例する。

即ち

（1）山岳高原に富み急傾斜の地多く隨つて急流瀑布の多い處は水力に富む一言にして言へば地貌の壯年期にあることが必要である。

（2）湖沼、氷河、雪原等は流水を調節し又其の貯水池となるべきものであるから其の多い處は水力の利用に便である。

（3）雨量の多い事が勿論必要である。

（4）雨量の分布が年中平均して居ることが大切で紀伊半島や臺灣のやうに颱風に供つて豪雨が多いと洪水の爲めに發電設備を破壞され地中海沿岸や我が瀨戸內海沿岸のやうに或時期に甚しく乾燥する處は發電不能となり、火力發電の副設備を要する。

右のやうな次第であるから第四紀氷河の影響を受けて湖沼の多い北米の中部以北 Skandinavia Finland Alps 等は水力資源甚だ多く Amazon川、Kongo川、楊子江なども水力に富んで居る。我國は地勢及氣候

が水力利用に適して居るので著しき進歩の跡を示して居る。彼の琵琶湖疏水を利用して電力を得たのは明治二十四年であるが、發電力は最近二十年間に八十倍といふ目覺ましい發展で經濟的に利用し得るもの六百萬キロワットに及ぶといはれ現に發電し得るものが百五十萬キロワットに達して居る。

今我國で電力を用ひるのは主として電燈と動力(電車、工場)であるが冶金製錬は勿論炊事、暖房等に電力が使用され隨つて是等の方面から薪、木炭、石油、石炭等が驅逐されるのは遠い將來ではあるまい。

發電所分布の多いのは長野、福島、富山、北海道、靜岡、新潟の諸縣である。

之と反對に水力發電所を有しないのは東京、千葉、大阪、香川、長崎、沖繩である。

二、富山縣に於ける電氣事業の趨勢

本縣の山嶽は高く雲表に聳え且急勾配なるを以て今日迄交通を妨げ文明の輸入を阻碍したることが甚だ多かつた。然し是等山嶽に源を發したる縣下多數の河川はこゝに深き溪谷を穿ち奔流となつてをる。現今科學の進歩は遂に此の自然の嶂壁を征服し奔流の利用、堰堤の設置等によりて盛んに水力電氣を企劃するに至つた。

扨本縣に於て電氣事業の起つたのは、明治三十二年富山電氣會社が大久保用水を利用して百五十キロワットの發電所を建設した事に始まる。次で明治三十九年同社が神通河畔に一千五百キロワットの庵谷發電所を設けたが何れも主として電燈事業を目的としたものであつた。其の後明治四十二年に至り、新潟縣の山口達太郎氏が片貝川に三千キロワットの發電所を設け下新川郡道下村に「カーバイド」工場を開業した之が工業を主目的とした發電所建設の嚆矢である。

その後大正七年に立山水力電氣株式會社が早月川に於て四千二百キロワットの發電所を建設し茲に初めて本縣の發電力は一萬キロワットに達し、其の後急速の發達をなして今日の盛運を見るに至つたものである。

明治三十二年	一五〇キロワット	同　四十年	一七〇〇キロワット	大正　二　年	五七〇〇
同　四十四年	四七〇〇	同　四十一年	二三四〇〇	同　六　年	六九〇〇
同　三　年	六五〇〇	同　十二年	五五四〇〇	同　八　年	二一四〇〇
同　七　年	一一一〇〇	同　十四年	九九六〇〇	同　十　年	二八九〇〇
同　九　年	二三四〇〇	同　二　年	一八七〇〇〇	同　十二年	五五四〇〇
同　十一年	四〇三〇〇				
同　十三年	七〇六〇〇				
昭和　元　年	一三九〇〇〇				

而して尙目下工事中の五ヶ所總發電力十五萬餘キロワットを加ふるといふ時、即昭和四年末には三十四萬餘キロワットの發電力となる豫定である。尙將來は八十萬キロワットの發電力を豫定し得べく、之が實現の曉は日本全國の十分ノ一は本縣下より出るといふ事になる。

昭和三年二月現在に於ける發電地點及發電力を河川別に記述すれば左表の如くである。

地點	出力	地點	出力
小矢部川	四ヶ所　一、四五五KW	神通川	七　五八、三一一KW

長棟川	二	四、二九一	熊野川	三	二、八九二
野積川	一	九六四	久婦須川	一	三、四〇〇
別莊川	一	三二八	常願寺川	五	二、七三七四
白岩川	二	一五七	上市川	一	三〇一
早月川	六	一三、一八五	片貝川	二	一、一四一〇
布施川	一	四三八	黑部川	四	六三、六六四
笹川	一	一三九	計	四一	一八八、二六一
目下發電工事中のものは左の如くである。					
庄川	二	八九、六二四	神通川	一	二二、二六五
常願寺川	二	三五、一四七	計	五	一四七、〇三六

尙水利使用許可濟で未だ發電工事に取りかゝらぬものは左の如くである。

庄川	二	神通川	一	長棟川	一
白岩川	一	早月川	一	常願寺川	三
				黑部川	九
				計	一八

其の他水利使用出願中のもので許否の處分なきものは百四十七地點の多きに上つてゐる。

電力需給の概況

現今の發電力は約十八萬キロワットの内其の三分ノ二は既に日本電力株式會社、大阪送電線及名古屋送電線により笹津より飛驒に入り京阪地方に送電せられ、三分ノ一即ち約六萬キロワットは富山縣下及新潟、石川兩縣に於て消費されて居るのである。又東京方面へは日本電力株式會社により、黑部より親不知附近に出で姫川より犀川を横斷し秩父大宮より武藏野に出で東京市に入る送電線を完成するに至つた。今後黑薙川に於ける諸發電所の完成に伴ひ、更に東京への第二送電線も出來る豫定である。又庄川に於ける小牧の發電工事は着々進捗しつゝあるから之が完成と同時に名古屋地方へも送電せられ、尙庄川上流の祖山發電所が完成すれば昭和電力株式會社によつて大阪に送電せらるゝ豫定で、之等の送電能力は優に三十六萬キロワットを下らないといふ。

縣下の主要なる電氣會社

供給先	發電所數	本社所在地	電力
富山電氣株式會社	七	富山市山王町	市營
電軌、伏木工場、能登、青海			
高岡電燈株式會社	三	高岡市片原町	日電
石動電氣株式會社	三	西礪波郡石動町	
中越水電株式會社	四	富電に合併	
大岩電氣株式會社	二	中新川郡上市町	
野積川水力電氣株式會社	一	富山市越前町	
立山水力電氣株式會社	三	富山市七軒町	
電燈、石動電氣、野積水力、日電、富岩、越中鐵道			

飛越電氣株式會社	一	富山市總曲輪	日電
富山水力株式會社	一	東京市日本橋室町	黑部
富山縣營水電	三	富山縣廳內	日電
越中電力株式會社	一	富山市總曲輪町	日電
加積電氣株式會社	一	中新川郡北加積村	富電
布施川水力電氣株式會社	一	下新川郡前澤村	中越水電
立山電力株式會社	一	東京市京橋區木挽町	日電
庄川水力電氣株式會社	一	東京市麹町區內幸町	日電
日本電力株式會社	四	大阪市東區高麗橋	伏木
高岡電燈、北陸共同大同電力株式會社		東京市麹町區永樂町	
昭和電力株式會社			

三、交　　通

本縣は交通系統に於て靑森、下關間裏日本の中間に位し、一方北陸線と目下工事中に屬する飛越線の分岐點たる要路に當つて居る關係上近時鐵道軌道の發達著しく、鐵道百七十哩五軌道五哩四五で總延長百七十五哩九五に達して居る。即ち國有鐵道北陸線は滋賀縣米原から來て本縣の平野を東西に貫通し高岡富山を經て新潟縣直江津に至り信越線に連絡し東西兩京その他關東關西地方の物產の集散、旅客の呑吐に多大の利便を與へ、中越線にありては高岡驛を交叉點にして南は城端西は伏木港を經て氷見に至り同支線は能町より新湊港に至つて居る。

地方鐵道には七線ある。縣營鐵道は南富山から千垣迄開通し、立山鐵道は滑川より立山村に至る。何れも常願寺川流域を圍繞して縣の中央を南北に走る。富山鐵道は富山、大久保、笹津を結び更に飛驒方面に省線飛越線と共に連絡して居る。加越鐵道は靑島より北陸中越の二線に連絡し礪波平野を橫斷して石動に至る。黑部鐵道は東部下新川郡內山村から黑部川の流域を縱走して省線三日市に連絡し、富岩鐵道は富山から東岩瀨港に至り、越中鐵道は富山から四方港に達して居る。何れも地方物資の集散及交通上に至大の便益を與へつゝある。

尙富山電氣軌道は富山市內の交通及郊外町村との連繫を容易にし、又神岡軌道は岐阜縣下の貨物運輸を圓滑ならしめつゝある。

而して本縣は北方太洋に面し水陸交錯し、近く能登半島の突出によつて一大灣を擁して居る。灣內幾多の良港があり、內地諸港及日本海對岸航路の要衝を占め、古來海運の發達に伴ひ貨物呑吐の要地と爲り今日の隆盛を來して居る。

斯く海陸交通の便能く備はり加ふるに道路及河川其の他の交通機關も亦近時異常の發達を遂げ以て社會狀態に至大の刺戟と利便を與へ文化の向上經濟の發達に資するものが尠くない。殊に本縣は水電國として卓越せる天惠を有し黑部、神通、庄、片貝等の諸大水力を控え發電能力優に百二十萬馬力を突破し裏日本に於ける電力は悉く茲に集注せられたるの觀を呈し實に本邦電力の一割を壟斷するといふ盛況を

呈して居る。

斯く輓近頓に勃興して來た本縣電氣事業は延いてあらゆる事物の發展を促すに至り而も之等の諸流域中には尙未だ開發の餘地頗る多く將來無限の需要に應じ得るが故に此の豊富なる電力は一面富山高岡兩市の都市計畫と策應して產業の振興、文化生活の向上に資する處が多いわけである。而して其の餘力は之を遠く縣外に送電し得べく裏日本に於ける電化の中心たらんとする狀勢愈々熾烈たるものがある。都市は東に富山西に高岡があり、文化經濟の二大中心をなして居る。

本縣の交通狀態概ね斯くの如く更に其の前途は伏木港の修築、飛越線の開通に依り表日本の中心地と裏日本の航路とを連絡し、以て後方地域生產の勃興を促し從來疏隔せられた地方との連繫を益々堅實ならしむることを得べく、之が爲め本縣は將に裏日本交通系統の中樞を抱し經濟上の一大中心地たるの地位に到達すべきは疑を入れぬ處である。而して其の實現は又實に萬人の齊しく期待する處である。

鐵道線路

北陸本線	自富山縣新潟縣界 至富山縣石川縣界	五九、八哩
中越線	伏木高岡間	四、五
	高岡城端間	一八、五
	能町新湊間	二、二
飛越線	伏木氷見間	五、八
	富山八尾間	一〇、六
縣營鐵道	南富山千垣間	一二、一
富山鐵道	富山笹津間	一〇、八
立山鐵道	滑川立山間	一三、〇
加越鐵道	石動青島間	一二、一
黑部鐵道	三日市宇奈月間	一〇、七
富岩鐵道	富山岩瀨間	五、一
越中鐵道	聯隊橋打出濱間	五、三

豫定計劃線

八尾―高山―岐阜間、八尾―金澤間、氷見―七尾間、富山―大岩間

飛越線開通と富山縣

飛越線第一期線は富山八尾間の開通した事で之は將來飛驒高山を經て岐阜に至り更に名古屋に連絡して日本海と太平洋をつなぎ中部日本を橫斷するのである。名古屋はいふ迄もなく東京大阪と鼎立して日本の三大主要都市となり、殊に其の中心地である。名古屋と直通するのであるから富山縣は勿論飛驒の產業文化の發展に貢献することが多いであらう。

飛驒は高原地であるが養蠶業、農業等の盛んな地方で大野、益田、吉城は殆んど富山縣から金融物資の供給を受けてゐる程であるから鐵道の開通と共に非常に利便を得るわけである。

第四節　聚落

一、居住地理學上より見たる越中平野

1、緒言

越中平野の中央に日夕生活して居る筆者にとつて、此の地域は地文上から見るも、將又人文上から見るも、非常に興味深い處と思はるゝので、此の二三年來實地踏査をなし、或は當地の識者に就いて聞いた事などを纏めて、茲に其の要點を披瀝するに至つた次第である。

2、地理的單元（Geographical Unit）としての越中平野

越中國は一の地理的單元を形成して居る。即ち東は三千米突を上下する日本北アルプスの連脈聳え、越後及信濃國と境し、南は約八百米突の飛騨國と境して居る。西は之に比すると遙かに低く、約四百米突の寶達連嶺を以て能登加賀國と境して居る。即ち三面共に山岳或は丘陵を以て境界をなし、只此の一面のみ富山灣に望んでゐて、何れも自然的境界でないのはない。

而して此の富山灣の凹入地形は、北陸地方地形の特徴たる東北西南性を破つて居るので、地體上から見て研究に値する重要問題と思ふが、之は他日に讓ることゝする。

次ぎに人文的方面から見ても自ら一單元を作つて居る。從つて研究上には比較的容易であり、且興味が多いと思ふ。而して筆者が茲に本題目を揚げた所以は、此の地域に限られた特種の居住狀態を見る爲めで、本論文の骨子も亦此處にあるのである。

此の他の地國は國土開發、殖産興業に於ける中心地として、伏木港は日本海沿岸第一位の貿易港である。

古國として國土開發、殖産興業に於ける中心地として、伏木港は日本海沿岸第一位の貿易港である。

海の入口として、殖産興業に於ける中心地として、伏木港は日本海沿岸第一位の貿易港である。

放生津。

3、史前時代の居住狀態

史前時代の住民が自然の洞窟に生活した事は、外國には多くの例を見るが本邦には其の例甚だ少く、大正七年始めて越中國氷見郡大境洞窟に之を發見したのである。(越中國氷見郡大境の白山社洞窟に就きて……柴田常惠人類學雜誌大正七年七月號)及(富山縣史蹟名勝天然記念物調査報告第三號大正十一年六月號)

次に越中國氷見郡加納村丘陵の麓に、加納の横穴と稱する古墳を數多發見した。(富山縣史蹟名勝天然記念物調査報告第四號大正十二年二月號)筆者は其の高さ凡そ十米突内外の同一水準に、横に山を取り圍んで相並べることが何故なるか疑問である。更に氷見町に近く朝日貝塚の發見あり、古代人の使用した石器、土器或は之に交りて人骨を發掘した事がある。(富山縣史蹟名勝天然記念物調査報告第六號大正十三年二月號)氷見の洞窟、加納の横穴、朝日貝塚皆凡そ十米突内外といふ事に、古代人の住んで居た當時は此の邊が海岸線に近い處であつたと思はれる。萬葉集の中にも古瀬の水海として詠まれて居るのは、即ち此の氷見の地方であり。近くは文政六年石黒藤右衛門氏の描かれた、射水郡分間繪圖を見ても十二町潟といふのが今日よりは遙かに廣く横はつて居るなど、之を裏書する有力な材料である。若し然りとすれば當時に比して地盤が隆起して居るといへる。此の事は他方に射水川、神通川の溺沒谷が沈降を證據立つると相撞着しはせぬかといふ反駁論も立てられるが、後者は最近に於ける地殼の運動で、隆起沈降は其の間に幾度か繰り返されたものと解釋するが至當であらう。

4、歴史時代以後の居住狀態

奈良時代國分寺は今の伏木町郊外に建立せられた。此の附近を地方人が古國府といつて居るのは、古へ國府の置かれた事に起因する。然れば此の地方では古代文化の中心が、國の西北部地方にあつたといはねばならぬ。而して吳羽丘陵以西の吳西平野が嘗つて東大寺墾田となつた事は、彼の正倉院御物天平寶字三年東大寺開田越中國射水郡須加野地圖及射水郡鳴戸庄といふ古圖を見ると、此の地方に方一町の條里制が施かれた事が解る。之によつて當時吳西平野が遙かに吳東平野より發達したといふ推斷も出來る。上古の居住狀態を考ふるに就いては、古い神社の研究によるが最も捷徑である。越中國に式内神社として數へらるゝもの三十四座、其の分布は又吳西平野より氷見の丘陵地帶にかけて比較的多く分布されて居る。即ち次の通りである。

○礪波七座

雄神神社（礪波郡雄神村）　比賣神社（同郡柳瀬村）　高瀬神社（同郡高瀬村）
荆波神社（？）　淺井神社（同郡石堤村）　長岡神社（同郡正得村）　林神社（同郡林村）

○射水郡十三座（大一座、小十二座）

加久彌神社（氷見郡神代村）　布勢神社（氷見郡布勢村）　速川神社（同郡速川村）
久目神社（同郡久目村）　礒部神社（同郡八代村）　箭代神社（同郡阿尾村）
氣多神社（射水郡伏木町）　物部神社（同郡守山村）　道神社（同郡作道村）
草岡神社（同郡堀岡村）　櫛田神社（同郡櫛田村）　射水神社（高岡市、大）

○婦負郡七座

鵜坂神社（婦負郡鵜坂村）　速星神社（同郡速星村）　櫛御氣奴神社（同郡熊野村）
白鳥神社（同郡保内村）　多久禮志神社（上新川郡大久保村）　杉原神社（？）
熊野神社（？）　姉倉比賣神社（？）

○新川郡七座

櫟原神社（中新川郡滑川町）　神度神社（同郡宮川村）　日置神社（同郡利田村）
雄山神社（同郡立山村）　建石勝神社（下新川郡加積村）　布勢神社（同郡布施村）
八心大市比古神社（同郡三日市町）

之によりて按ずるに、吳西平野たる礪波、氷見、婦負郡に比較的多く、三十四座中二十七座は此の地域に分布され、新川郡は上、中、下三郡合はするも比較的少く、僅かに七座に過ぎない。之を以ても當時吳西の吳東に比して人口稠密、聚落多かりしを想像する事が出來る。能登四十三座、加賀四十二座、越前百二十六座、越後五十七座佐渡、九座といふのは當時の北陸人口分布の大勢を覘ひ得る材料ではあるまいか。

5、現代の居住狀態

（イ）人口密度　現今の居住狀態を知るには、先づ人口密度から調査を始めるのが順序である。越中國全體は一方粁につき百七十四人之を内地全體の平均百五十六人といふに比較すると稍大である。而して別葉富山縣管内圖の示すやうに今之を吳西平野、吳東平野、黑部川、扇狀地及山岳丘陵地域として區別

すると一目瞭然分布の狀態が讀まれるのである。

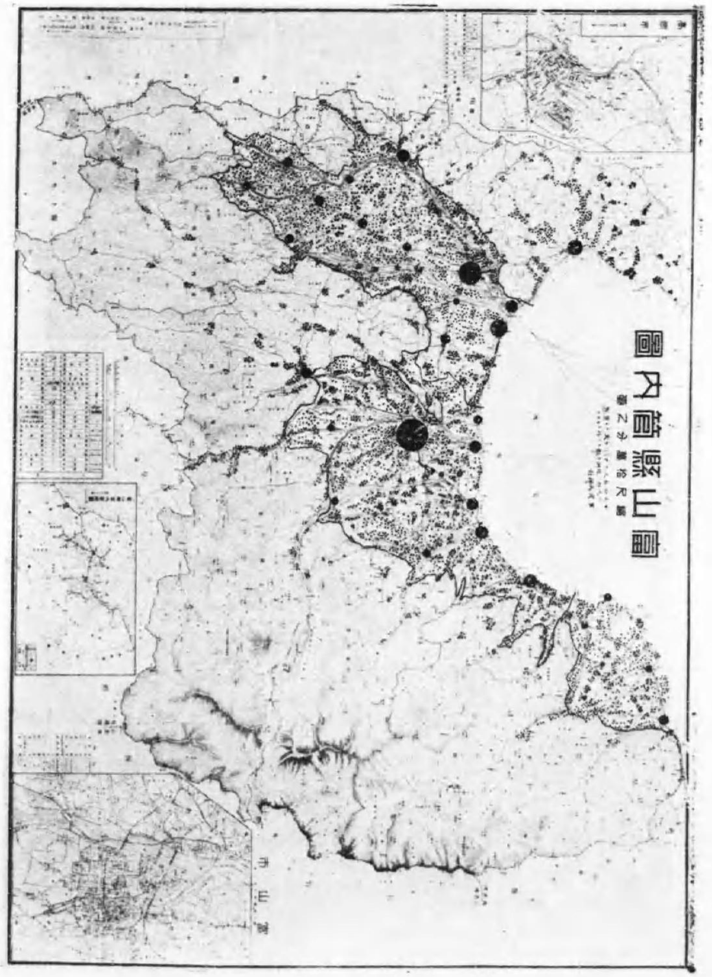
然し之が密度の計算に至っては統計書が其の儘すぐに役立つといふのでないから、自然自分で可成面倒を忍んでかゝらねばならぬ。筆者は先づ大約二百米以下の低地を平野とし、以上の高地を山岳丘陵地帶に入れ、第二回國勢調査の材料によつて算出した處次の如き數字を得た。

	一方粁ニツキ	面積	人口
吳西平野	六〇一人	四四一、一方粁	二六五、二三六人
吳東平野	五六一	四二〇、八	二四六、四〇一
黑部川扇狀地	四一二	一三八、一	五六、九四三
山岳及丘陵地	五五	三二五七、四	一八〇、六〇一

「氷見郡の海岸地方は二百米以下の低地聚落も此の中に算入す」

之によれば明らかに吳西、吳東、黑部川、扇狀地と漸減して居るのを見る。而して平野に於ける農村經濟の狀態では既に飽和狀態に達して居るので、米作に次ぎて賣藥、織物、綿絲紡績、清酒、蠶絲業等が都市には勿論農村の間にも副業として起るに至つた所以である。

（ロ）吳西平野　玆に最も注意すべきは、吳西平野の農村分布の形式である。筆者が先きに越中國に限りて見る特色と稱へたのは、小川博士が越中國西部の莊宅に就きて（地學雜誌第二十六年第三百十二號）と題して發表され、其の後牧野信之助氏が舊加賀藩の散居村落制に就きて（地學雜誌第二十七年第三百十二號）と題して發表された問題で、其の後暫く之に關する論說を見なかつたが、地球聚落號に再び小



さたにせよ此の國は人口一平方粁に一〇〇人を以て密度の最高を示すもの。

明治十四年頃は富山縣の人口密度は全國平均の半數に過ぎなかつた。

しかるに今日は全國平均の倍數に達したのである。

川博士の日本の村落に就きての論文出で、其の中で屢記述されて居る。今その要點を述ぶると、各農家が百乃至二百米突程の距離を隔てゝ散點し、且其の農家が戸々孤立して居る事は實に珍無類の居住狀態である。元來人は孤獨生活を欲せない者であるが故に、少くとも其處に一戸の農家が建てば次第に之に隣つて二戸三戸の農家を見るに至り、後には幾十幾百の戸數を增加するのが自然の勢である。然るに吳西平野に於ては昔から此の居住狀態に變化を見ないのであつて、同平野の中でも北陸線以北には少く、又吳東平野に至つては只神通川及常願寺川扇狀地の頭部に少しく之を見るばかりで、北陸地方では他の何處にも見ない。之を要するに其の分布が吳西平野の一小區域に止り、廣く見ても越中一圓に亘らぬ程度の小範圍に限られてゐる。而して各農家は皆其の周圍の田地を耕作して居るが故に、小川博士は之に孤立莊宅と命名され、又本邦農民の原始的居住狀態を追想せしむる最好の記念物として、眞に珍とすべきであらうといはれた。然れど牧野氏は封建時代以後藩の政策として人文的に散居制度を取つた爲めではあるまいかと、史實を擧げて其の聚落の比較的新らしき事を稱へ、小川博士の所謂原始的居住狀態の遺物視するといふ事に稍躊躇して居るものゝやうである。然し東大寺開田須加野及鳴戸庄地圖の如きは有力な史料であるから、當時條里制の施かれた其の儘を繼續して居ると考へられた小川博士の意見を否定することは出來ない。只之を卓見として首肯するに足る有力な材料は地圖以外未だ手に入らない爲め恰もかゆき處に手の屆かぬ憾がある。特に筆者は家の周圍の針葉樹が殆んど十中の八九分迄は年新らしく千古を語る古木稀なるを不思議に思ふ。藤田文學士の日本民家史は斯界の權威ある著述として敬服して居る處であるが、只其の中に何れも千古を語る古木とあれども此の點稍疑問なき能はずである。然れ

ど小川博士の假定說は、家の周圍を樹木で取り圍んで居る事が本邦古代を偲ぶ神社の形式に類似して居るといふ論據から出ており、又孤立莊宅が今日に至る迄破壞さるゝ事なく繼續して居る。原因は强き卓越風にあるとされておる、風は卓越風と限つたわけではなく、年中西南或は西北風が多く西の性質を必ず備へて居る、之は此の地方の特色で、其の理由は滿洲及西比利亞に高氣壓が發達し北陸一帶に低氣壓が發達しても風は螺旋狀に右にそれて吹き込むわけだからどうしても西の性質を有することゝなつて來る。それ故家の周圍の樹木は南及西に高く茂り、北に低く東は殆んど例外なく開いて居る。土地の人は家の正面を立山雄山神社の方に向けるといつて居るが、信仰から來て居るのではなく、自然に順應する爲めである。

此の地方が風が原因で屢火災に見舞はれた事は、富山高岡を始め歷史上名高い事で、近くは大正十四年九月七日瑞泉寺を以て名ある井波町に大火災を起し、其の火元の風上なりし隣家は無事であつたに反し風下に建ち並べる家は全部延燒して町の大半を灰燼に歸せしめたのである。小川博士の論文中に井波町民が風に戰々恟々として居る有樣を書かれてあるが、豫言の的中に照し合せて會心の事に思ふ。そこで斯かる火災の害を避けんがために、孤立莊宅を其の儘持續してをると考へられたのである。又此の平野は庄川、小矢部川の冲積扇狀地で、昔から河道の變遷が非常に多かつたらしく、今も地形圖に扇狀地の形が西に展開しておるに係らず、河道に沿ふて北流しておる。斯くて河道の變遷といふ事が農家をして移轉を餘儀なくし且孤立せしめたのではあるまいか。

筆者は幾回か實地踏査をして見たが、其の小作たると自作たるとを問はず、自家の周圍を耕作地として居る。家の周圍の針葉樹は防風及防火の爲めであるといふ事に就きては少しの疑問もない。

次に約方一里の面積の中に、此の種孤立莊宅の經濟的中心として戸出町、出町、福野町、福光町の如きが所謂市場町の性質を以て、等距離に並び發達して居る事が又一異觀を放つて居る。之等の町は此の經濟狀態に激變なき間は依然として急激の發達を望むことは出來まい。而して更に之等の大中心として高岡市があり、其の門戸に伏木港の發達を見るに至つた。今や伏木は高岡市と合せて大高岡が都市計畫で進行中だから、完成の曉は面目を一新して、商港としての活氣は裏日本隨一となるであらう。

（八）吳東平野　神通川及常願寺川の扇狀地が相交錯せる地域で、殊に常願寺川の扇狀地は明瞭である。吳羽山から眺めると、河床が其の附近の田畑よりも一段高くなつて、白く輝いて見える。之は盛んに砂礫を運搬する爲めに年々と河床が高くなる結果である。富山縣の川は地形の關係上何れも上流より急轉直下、下流に移るのであるから、扇狀地の發達は見事である。

富山市は吳東平野の中心である。同市から一里乃至二里の距離を隔てゝ笹津町、上滝町、上市町三日市町等が恰も半圓の孤上に發達せるの感がある。之は地形に左右されたもので、平野と山地の境、農村と山村との境に發達したものである。富山市は縣の政治的中心地で、又經濟的には高岡と相並んで二大中心の一であるが、今若し其の中間に横はつて居る、吳羽丘陵がないものとして考ふる時は、或は金澤を凌駕する程の自然的要素を備へて居るといへるだらう。殊に高岡の伏木港に對しては東岩瀨の築港と富岩運河の計畫があり、之が將來居住地理上に一大變化を及ぼす事は注目に値する。

（二）黑部川扇狀地　之は地形上、吳西、吳東と相對立區別すべき一の地理的小單元をなして居る。而

も扇狀地としては日本のどの河川よりも美事なもので、其の東邊は辻村教授の所謂棚山斷層を以て境し北端に泊町があり、西北端には三日市町がある。扇の要は愛本峽で、直ちに之に接して宇奈月溫泉地が發達して居る。之は黑部川と共に近々數年の間に急激に發達した處で、居住地理學上甚だ興味深いものあるが故に此處に特筆するわけである。

富山縣は第一回國勢調査と第二回のそれと比較すると僅かに二、三%の增加に過ぎない。然れば村落に於ては農業經濟では飽和狀態にあるが故に、賣藥或は織物、紡織養蠶その他の副業に從事して居るけれ共尙且他に移住するものがあり、或は勞動工女として縣外に出るものがあり、一時的には賣藥商人が季節的に縣外に行商する者一萬人に近く、九十人に一人の割である。斯くの如くして村の人口增加は實に微々たるもので、全縣下二百六十七ヶ村の中百二十二ヶ村は增加して居るけれ共、過半百四十五ヶ村は却つて減少して居る。斯かる形勢の間に內山村は百三十二%（八六九人より二〇三二人に增加）愛本村は百六十五%の增加である。

宇奈月に溫泉場の開かられたのは大正十三年五月、日本電力株式會社が黑部峽谷に着手して起工式を擧げたのは同十一月の事である。然れば僅かに三ヶ年間に寒村三戶しかも其の三戶たるや百姓の作小屋三戶であつたといふのが、今や二百五十戶、千二百餘人の賑を見、裏日本ばかりでなく關東、關西より浴客を集むる大溫泉地と化したのである。

之と相對して好一對なるは、東山見村（二三〇五人より四〇七八人に增加）七十六%の增加である。此處は庄川の堰堤工事が其の原因なることはいふ迄もないが、堰堤は其の規模東洋一と稱せられ、二千萬圓の工費を投じ四ヶ年計畫で、今や工事最中にあり、多數の工夫が移住して來て居る。其の運命は電氣事業と盛衰を共にすべきもの、或は一時的で工事完成の曉は又人口減少して復舊するかも知れぬが、黑部の廊下と稱した人跡未踏の大峽谷も、或は平家の隱れ家として古風を維持し來りし幽谷の地五ヶ山、白川の奧も電氣事業によりて、浸蝕せられ面目を一新するに至る處、時代の齎す地理的開鑿の一として興味あり、且注目に値すると思ふ。（昭和四年三月二十八日稿　理學士石井逸太郎）

二、越中國西部の莊宅（Homesteads）に就きて

明治三十一年八月飛驒國高山から神通川を下つて越中國富山に立つた時に、此の邊の田園の風景に一種の特色あることを注意したが、如何なる點が我々旅客の目に新なるかを把持し能はなかつた。

然るに本年八月越中國で山島として罪人流滴の地になつて居た利賀谷を探るべく、高岡市から福野迄城端線汽車に乘つて、是から東本願寺の別院瑞泉寺で有名な井波町へ行く途中で再び越中平野の田園風景に接して、偶然十數年前の漠然たる印象が喚起されて、此の風景の特色に就いて一層精密に注目した結果として、本邦に於て稀に見る處の一種の居住狀態で、英語で Homesteads 獨語で Hof と呼ばれたものであることを知つた。此の種類の居住狀態は日本の農村經濟の研究にも頗る關係あるもので、殊に居住地理學 Siedelungsgeographie の研究の未だ緖に就かざる日本では、其の研究の出發點の一として最も面白からうと思はれるから玆に見聞した處の概畧を報告する。

我々は本邦に於ける此の種類の農家居住の型式に就て述べんとするに當つて、先づ玆に揭げた莊宅なる語の意義及其の歐米及本邦に於ける分布に就いて一言する必要がある。我々が今玆に莊宅なる新名稱

を提出したのは Homestead（Hof）の譯語で、周縁に附屬せる田畑を有する屋敷、即ち換言すれば田莊を有する家宅を約したのである。今述べるのは特に其の中の孤立莊（Einzel Hof）の場合で單に孤立した農家といふのでなく其の周邊の土地は此の家で耕作することになつて居るのが其の一要件である。

西洋の農村には莊宅系（Hofsystem）と村落系（Dorfsystem）の區別があつて、前者は北獨逸平原ウエストファリヤ（Wegel川以西）和蘭、白耳義の北西部 Brittagneu 半島、愛蘭等の原ケルト民族を逐斥して侵入した時に先住民族の居住型式を其の儘繼承したと考へた學者があつた。

然れどもケルト族と全く緣故を持たぬ處の諸威、瑞典の北部にも見られ、又一方はボーヂュ、黑森の南部及アルプスの北斜面等にもあつて、此等は山間であるために地勢の關係から起つたもので、必ずしも特種の民族の居住に關係してゐないと考へられるのである。

東洋では滿洲内蒙古等の農家には頗る大規模の莊宅があつて、高い堅固な土壁を繞らし其の四邊には矢倉を建て木砲などを据へて數十の民壯、又は民勇と稱する兵卒を養ふて馬賊襲來の防禦に備へて居るのは珍らしくない。此の如き莊宅は多くは燒鍋（即ち酒精釀造所）で政府の特許を受けて燒酎を製造するもので其の周邊數十百町歩の土地を開墾して、其の麥高粱から酒精を蒸溜して遠方へ輸出して居る。

北支那の農村を見るに是と同じやうに發達したものらしく、王家莊とか李家莊とかいふ樣な名稱の村落には王氏、李氏と稱する唯一戸の大地主があつて、其の屋敷内又は其の周圍には小作人、小商賣等の家宅が附帶して出來るのが頗る多い。水滸傳に描いたもので、數百年來著しく變化を受けない事を推知し得る一資料である。

現今日本内地でも莊宅式居住の行はれて居る場合は稀に之を見るのみならず、北海道には純然たる北米式の莊宅もあると聞いて居る。其の内地に於ける例は近い時代に開墾された地方で、近畿地方では、播磨の東南、即ち三木、明石、加古川間の第三紀層邱陵の高臺や阿波國、吉野川下流の三角洲地方や之に類似した淡路北部の高地上の農家居住の狀態は此に屬する。

紀伊半島でも紀ノ川北岸の洪積紀高臺の農家が同樣に散布して見えるのは、地勢及び地味上後れて開墾せられたので生じたものかと考へられる。四國では高松附近には孤立農家があるが、是は稍趣味を異にして居る。北海道では屯田制を行つた頃は班ち與へた土地の中央に、農家を建てる事にして密集した村落を作らしめなかつて、内地農民の慣れた居住狀態と異つてゐた結果として、拓植の目的が達せられなかつたと該地を旅行した中目文學士から聞いた。是は恐らくは當初に北米の莊宅條令（Homestead Act）を模倣した飜譯的法令の弊であつたろう。

越中國東西礪波郡の農民の居宅は、通列孤立家屋で其の周圍に（東及南に面した方にも）針葉樹（主に杉樹）の立木を繞らし、家屋の構造は藁葺や二階屋で其の屋根の勾配は非常に急で、此の屋根裏が二階をなして加賀邊で見る物置きに使用せられたのと異つて、半間又は一間位の戸障子のある窓を開いて居る。家屋内部を實見し得なかつたが、多分二階住居の出來得る構造に成つて居ることゝ思ふ。

此の如き孤立農家は必ずしも此の地方に限られた譯ではないが、其の散布狀態が頗る規則正しく大約百乃至二百米突の殆んど等距離に建てられて、其の間は田畑で隔てられて居ることは他に觀られぬ異觀である。

我々の此の邊の田園風景が何處となく他の地方と著しく趣を異にして居ると感じたのは、全く此に在るのである。此の孤立家屋の分布狀態は陸地測量部假製二萬分の一金澤近傍一二三四五六七八號、即ち高岡市西南の庄川、小矢部川間、沖積地の地形圖を披けば明瞭に見られる。不幸にして、未だ之に隣接する高岡及富山近傍地形圖は見ることが出來ぬ爲めに、此と同じ孤立家屋が是より東へ何處迄分布して居るかを確知し能はぬが、此の諸圖幅のみで見れば、石動を經て金澤に通ずる北陸街道以北には全く及んで居らぬ。又兩郡の南部では、山地邱陵地に近くに從つて局部的に多少近接して聚落をなす傾向を生じ、又個々の聚落は稍廣い間隔をなし、山邱の麓では殊に聚落が多く見られる。八圖幅中最も孤立農家散布の著しいのは出町圖幅で、中央に同名の稍著しい都邑ある外には、方二里以上の坦々たる平野に數十戸の聚落すらも見えない。

又主な都邑間の距離は高岡市より戸出、出町、福野を經て福光町に至る間隔各約一里半宛で、其の間に之といふ著しい村落は殆ど見られない。前に述べた分布狀態から容易に推定し得べく、農家の孤立に伴つて此の地方の耕作習慣と自ら一種特有のもので、井波町某氏の談話によれば、此の邊の農家では宅地周邊の土地は、其の所有の自他に屬するに關らず必ず之を耕すを習慣とし、他人に來て耕されるのを非常に恥辱と感するとのことである。斯くの如く孤立農家は各一定の耕地を自家の周圍に所有、又は小作して居るのであるから、一種の意義の莊宅制 Homestead system が完全に行はれて居るのである。越中國の田制に關しては、大日本古文書四に收められた、東大寺越中國諸郡庄園總劵（正倉院文書天平寶字三年巳亥丁一月十四日）及東大寺開田越中國射水郡須加野の地圖が唯一の史料で、此の地圖で畧方一町

の方形の條里制が此近傍に行はれた事が知られる。若しも此の如き區劃によつて、耕地が實際に區分されて農民がその中央に住宅を構へたものとすれば、自ら莊宅式居住が或立した譯で、從つて現今見る處の孤立莊宅は班田當時の遺制が尙殘存することゝなるが、史料には其の居住の狀態を徵すべきものはない。

若し果して其の遺制であるとすれば、天平時代から一千有餘年の今日迄保存せられたもので、本邦農民の原始的居住狀態を追想せしめる最好の記念物として、眞に珍とすべきであらう。

田制と共に考ふべきは奈良朝時代に行はれた家族制度で、正倉院文書中の戸籍簿によれば、一家族の人口は多數であつて、其の當時の狀態が庄川上流の飛驒國白川村に今も尙連綿として保持されて居る事は德川候爵の實地を調査せられた所によつ明かであつた。

而して白川村に見る處の家屋と其の下流の越中平野のものと大小の差はあるが、構造に於ては畧類似して二階が居宅に充てられて居るらしい。此の家屋の構造の點から見れば或は奈良朝の頃、此の地方の開墾が行はれた頃に、現今の見る處に類似した莊宅式居住は、既に在つたのではあるまいかと思はれる。

加之ならず莊宅式居住は、日本古代の民族制度に類似した習慣の行はれた地方に見らるゝので、愛蘭の莊宅式居住は此の關係から說明さるべきは疑はない事實である。

愛蘭はケルト民族の居住地で此處に行はれた氏族制度（Clan system）には一の氏 Tuath に氏の上に呼ぶべき族長 Chief があつて其の下に族人 Trifesmen と奴婢が隸屬して居て、是が若干の族 Septs に分れて、氏の占有した土地を分類して村の如きものを作り、此の族が又個々莊宅に分れて一戸を成し、之に戸主 Aire があつて其の死去に當つて諸子に分與すべき耕地の不十分な場合分配されずに、數家族が原と

の一に共同生活を繼續することもあたといはれて居る。果して然とせば、是は飛驒の奥の白川村に今も尙行はれて居る處の家族制度に最も類似したものと思はれる。此の類似も日本古代に莊宅式居住が行はれたのであらうと推定を助ける樣に思はれる。

然れども吾人は、班田制に伴つて莊宅式居住が行はれたるべきものとの推測は、單に推測として茲に言明するに止め、其の當否の決定は更に此の地方を詳細に研究し、又廣く他の地方に就て比較研究した後迄保留して置き度い。

此の地方は班田制の布かれた後、莊園となつて戰國時代に入り終に豐德兩氏の頃に及んで、前田家の所領として三百年の久しきに亘つたので、其の間には種々の變遷を經たのであろうと思はれるが、前田氏以前に徵すべき史料は中絶して居る。天平寶字三年の東大寺越中國諸郡庄園總劵（正倉院文書）を觀るに未開地頗る多く、礪波郡の如きは伊加流伎野地壹百町全く未開地なり。伊加流伎野なるものは、今の何處に當るや詳にせず、或は伊須流伎即ち石動の誤かと思はる。和名抄卷七に出でたる地名を現今の地名に當つて得るかと思はるものは、高揚（註多加牧岐とあり、今の高牧ならん）川合（今の地名川合田あり）八田（今の矢田か）等にして何れも古來の北陸交通路に近い處が邱陵間、又は河流の氾濫を被らぬ高地が多い樣である。之を越中古圖（越中史料附錄）に比較するに、庄川小矢部川間の平野には無數の新田開墾に關係ある地名が著しく目立つて居る。是に由て考ふれば、此の地方は奈良朝以後前田氏の所領となる迄に盛んに開墾せられたので、延曆二十三年には越中國は上國と定められ、拾芥抄に田二（又三）萬三百九十九町と見えたのも此の結果であらう。又一方から考ふれば地名に川、島など及新田開墾を示すものが多いことは、小矢部川、庄川が屢々氾濫して、河道の變轉のあつた結果とも推測され、頗る近い時代迄農家は耕地の興廢と共に移轉を餘儀なくされたらうと思はれる。從つて斯くの如き新開地への移住が近畿地方に見ると同じく、莊宅式居住を促したことも頗る蓋然である。

前田氏の所領となつてから三百年間の農政に關しては、記錄によりて之を窺ひ知ることを得べく、其田地割制度は農學士栃内禮次氏の研究に依つて頗る明瞭となつた。此の制度に約二十年毎に一村の耕地を割換へる仕組であつて、領主の下にある高持と稱する土地の耕作權を有するもの丶間に耕地が抽籤で互に取り替へる事になつて居る。此の制度は寛永年間から實施に着手せられたもので、其手續は隨分煩瑣なもの丶樣である。

然れども其より以前領内の農民の課稅は毎年豐凶によつて率を定める方針であつた爲に、農民の不便不利多く給人（知行所を有する士人）の個々が任意に稅率を定める爲めに不公平なことも多かつた。之を改善して、個々農民の負擔を公平にする目的で、此の如く一種の耕地共有制度を實行したので、前田氏所領の農村は此の制度實行の結果として、王政維新迄三百年間に幾回も耕地割替があつた。此の制度は農村の耕地を狹小な筆數に分割せしむることになつて、現今も北陸地方は他の地方に比して土地は細分されて居る。此の如く所有權が土地に固定せずして、何れの農家も小作と大差なき狀態で、絶えず耕地の所有權が移動することになつて居て、且一家の所有が或期間限りで村内處々に細分されて居たので、各戸の耕作に當つて遠い自家所有地を、其の最近の農家に小作せしめると同時に、自家に近い處は所有權の如何に關らず、之を耕作する習慣を起した事は疑ない、故に我々の聞いた處の農家の各其の周圍の

田地を所有權如何に無關係に必ず耕作する現行習慣は、前田氏の田地割制度に伴つて起つた習慣の今に繼續して居るものと信ずる。

然れども農家が孤立して住居する事實は單に此の耕作習慣のみからは說明する事が出來ぬ。是は前に述べた樣に新田開墾の場合に起つたもので、或は其の起原は奈良朝頃にあつたのであろうし、田地割制度は此の習慣を打破せずして、更に助長保存するに好都合なものであろうが、夫でも農家が村落を作つて生存する方が種々の便宜快樂ある筈であるに係らず、今日迄其の原始的狀態を繼續し得たには、尙此の外に他の因子がなくてはならぬ。我々は現存する孤立莊宅式居住に對して、此の地方の氣候が頗る重大な開係を有してゐる事を認る。

同じ井波町某氏の談話によれば、此の地方の氣候上著しい現象は、飛驒高原の方から吹きおろす一種の嵐、フェーン Foehn 風で氣壓低い山上から其の高い平地へ降るので、溫度が高まると共に非常に乾燥な風となつて南から吹くのである。此の枯風は特に雪融けの前後に吹き、二十四時間以上吹き荒むことがあつて、此の時に火災が起れば廣く蔓延する危險がある。井波町では此風が一定時間に亘つて吹き歇まぬ時は防火の注意として、細民の竈火を禁じて村費で粥を炊き出し、每食一人大杓一杯宛を給與する習慣になつてゐる。

前に述べた孤立農家の周圍に繞らした針葉樹は、此の强風を避くる爲めに栽えられてゐて、火災の場合に藁葺屋根の農家は其の防護の下に不測の災厄を逃れ得るのである。立木は斯くの如く農家に缺ぐべからざる附屬物で、之を伐り去ることは非常な不名譽となつてゐる。栃內氏によれば、田地割制度には

敷屋地に接地した日光通風の不良なため、作物に害ある土地は「蔭引」と稱して屋敷の東南は一間、西北は二間乃至二間半を除去する例なりといひ、同氏は之に附加へて植樹を禁ずるは、蓋し當然といはれて居る耕地より二間丈け引込めて屋敷の防風樹を栽える習慣は、越後地方に行はれてゐるとの事で、栃內氏の意見と同じ樣であるが、越中の他の地方は知らず、此の邊の理狀から考へると、此の地方では當時割替に當つて面積に對する石高の計算に當つて此の坪數に應じて控除したかと思はれ、田地割に當つても、此の防風樹存在は初より許容されて居た筈と考へる。此の點は實地に就いて更に調べる必要がある。

農村の箇々の家屋が密集して、聚落を作らずして戶々間隔を置いて建てられる事は、火災の蔓延を防ぐ最も好き方法であつて、之が爲めに此の如き農村には街道に當つた密集村落又は市街の如く大火災に罹らぬ日本海沿岸地方の枯風の爲めに大都邑が、屢々殆んど全滅に頻する火災を被つた例として富山、高岡市は共に著しいが、冬季三四月頃の火災に大なるものが屢々あるのは、前に擧げたフェーン風の結果で近頃農村の大火災では、明治二十四年三月三十日に百三十戶を燒拂つた立野村の火災のやうなのがあるが、是は高岡市の西に當つた北陸街道の密集村落である。

我々は此の乾燥な强風あることが、農家として自衛上知つてか知らずにか防風樹を尊重し、又成るべく互に離隔して居住する習慣を永續せしめたらうと思ふ。換言すれば此の Foehn なる氣候的營力がなかつたならば、多くの村落の如く開墾當時は孤立農家であつても、間もなく密集村落に進化する趨勢に馳られて、遠き過去に於て普通の村落に變じ去つたであらう。之と同じやうな場合が、出雲國宍道湖畔の

農村にもあつて、石橋文學士が調査に着手せられて居るから遠からず、其の詳報を得ることゝ信ずる。

以上述べた處は短時間の聞見を基礎として意見を加へたもので、特に天平年間の莊園總券及和名抄地名の考證の如きはまだ、精覈する能はざれば莊宅の成立を當時にありとする。假定說の如き今後の研鑽を要するは勿論で、農家戸々の生活及耕作土地の分配の狀態等に關して更に詳細な資料を得るにあらざれば、莊宅そのものゝ如何に關しても決して眞相を明かにし難い。唯その未定未詳の問題である爲めに、茲に概報を揭げ、越中及その他の地方に於ける同型式の居住狀態に關して、廣く大方博雅の報告研究を得て本邦の居住地理學研究の端緒を開發せらるゝことを希望する次第である。脫稿に當つて、趣中に關する史料に就いて有益な注意を與へられた同僚內田文學博士の好意を多謝する。（大正三年十月十六日稿、理學博士小川琢治）

三、富山市

第一回國勢調査六一、八一二人
第二回國勢調査六七、四九〇人

昭和三年末人口八四、〇〇〇人富山市は本縣の中央にあつて、其の周圍接屬市街として東南は上新川郡の堀川村、山室村、新庄町及奥田村に連つて居り、西北は婦負郡百塚村、西吳羽村、朝日村、神明村、鵜坂村に隣して居る。神通川の一支流である鵜川は、市の東部を流れて市內には所謂鵜東の區劃を作つて居る。又神通川は市の西部を貫流し、東岩瀨港に注いでゐる。本市は往古藤井村といつて、眞言宗の一寺藤井富山寺のあつた一寒村で、市の名稱に就いては種々の傳說があるが、根據のあるものは一もない。之前田氏十萬石の城下町として發達したものである。時勢の進運と共に交通機關の發達著しく各種の產業も進み、市の發展は日に進んで來たので、接續町村を編入すること多く、明治三十四年には奥田村の一部及東田地方の一部を、四十二年には今の神通、新富、愛宕、新中島、安野屋、磯部、西田地方、大泉等を、大正六年は田刈屋、五艘、駒見、安養坊、石坂、石坂新、畑中等を、更に大正十五年には東吳羽村の全部を本市に編入したので、急激に面積及人口を增加し、全市は百十一ヶ町に分けられて居る。鐵道北陸本線に沿ふ主要驛で、本市を起點として富山鐵道、富山縣營鐵道、富岩電車、越中鐵道及飛越鐵道が放射狀四散して居る。更に北方僅か二里を隔てゝ東岩瀨の外港を扣えて居るから、貨物の集散旅客の往來夥しく、商工業の隆昌も亦昔日に比し一新して來た。

富山縣廳、裁判所、步兵第三十五聯隊、藥學專門學校、高等學校を始め多くの中等學校があり、又商業會議所、米穀取引所、圖書館、病院、諸會社、銀行等は市の內外に散在し、市內には電氣軌道を敷設して交通の便を計り、又自動車の往來繁く街衢殷盛を極めて居る。殊に近年市區改正せられて出來た堤町通りの如きは、北陸地方の都邑に類のない立派なものである。

物產の主なるものは賣藥で、其の產額年八百六十三萬圓に達して居る。織物の產額も近年特に激增して絹織物のみでも百五十七圓に達し、外に綿織物五十五萬圓、其の他釀造、製肥、製綿等の工業が進步して來た。殊に近年市の東部一帶の地には工場建ち、益々工業方面の發展をなしつゝある。

富山城趾　富山驛から南十町餘神通癈川地の南岸總曲輪にある。城の外濠は既に埋立てられて昔の俤もないが、僅かに舊本丸周圍の濠溝壘壁が殘つて居て、富山縣廳が其の構內にある。本丸正面の桝形及石壘や本丸及西丸を繞る內濠は、遠く封建時代に根底を有する富山市の發達と沿革とを、無言の間に物語つて居る。此の城趾は今を距ること三百八十餘年前、即ち天文元年越中の土豪水野越前守勝重の經始

した處で、神保氏三世之に據り、天正四年上杉謙信に攻撃せられて城陷つた。同七年織田信長その臣佐々成政を越中に封じたが、成政神通川を利用し濠を深くし壘を高くし城櫓を改修して、之に據つた。然るに豊臣秀吉、成政の異志あるを聞いて、天正十三年八月自ら兵十萬を率ゐ、前田利家を先鋒として來り攻めた。成政抗する事能はず、遂に祝髪錨衣し、呉羽山の本營其の軍門に降つた。其の時秀吉は成政に新川一郡を與へ、礪波、射水、婦負の三郡を削つて前田氏に與へたから、利家の子利長は射水郡守山城に入つた。文祿四年前田氏に新川郡を加封してから、越中全國が前田氏の所有となり、慶長二年利家守山城から移つて富山城に入つた。慶長四年に至り一旦金澤城に歸つたが、同十年になつて再び富山城に來り、老を養ひ城廓を修造し城壁樓櫓高く聳えて要害堅固であつたが、同十四年大火の爲めに城の内外は悉く烏有に歸した。仍て利長は魚津城に轉じ、次いで高岡城に徙つた。斯くて富山城址は荒廢に歸したが、寛永十六年六月二十日前田利常次男利次を富山に分封するに及んで、萬治四年更に城廓を築き、爾來前田家累代の居城となつた。萬治四年の調査によると町數八十二、戸數二千九百七十八、人口一萬六千であつた。(萬治年間の地圖は富山市中野新町若林常太郎氏所藏せらる。)明治六年新川縣廳を此所に置き、同九年新川縣を廢して、石川縣支廳を置かれたので、之を以て縣廳敷地とした。同三十二年縣廳を山王町に移し、日枝神社を此の地に遷座して公園地となし、翌年開設されし關西府縣聯合共進會を此所に開催しやうとして、會場將に落成の間際に至り、同年八月大火の爲め悉皆燒失したから、再び日枝神社は山王町舊社地に遷座し富山縣廳をこゝに新築するに至つた。(現今の富山縣廳は即ち此の富山城阯の舊本丸阯に新築さたものである。

富山縣會議事堂　富山縣廳構内、富山城西の丸阯にある。明治四十一年七月起工、翌年九月竣工、嘗つて東宮殿下北陸行啓の際御旅館に充てさせられた處で、當時の御座所は出入を禁じ永く崇敬して居る。大正十三年五月六日秩父宮殿下立山御登攀の途次往復とも之に御成あり、又同年十一月十日今上陛下本縣に行幸あらせられし際御休息處にあてられた處である。

廣德館阯　元富山城三ノ丸桝形内で、現に其の遺跡には富山縣教育會館や縣營住宅等がある一劃で、安永二年六月、六世藩主前田利與始めて此所に藩學校を創立し、廣德館と名けた。之が富山に於ける學校の嚆矢である。

千歳御殿阯　富山藩十世の主前田利保の隱居所で、新に富山城東の出丸に築造し、嘉永二年五月竣工した。結構壯麗周らすに此を以てし道の東側一帶二重に櫻樹を植えた。又藥草園もあつた。現在の櫻木町は御殿阯で安政二年二月の大火に殿宇全體内類燒の厄に遭ふた。後再建されたが、廢藩置縣と共に之を毀ち、貸座敷免許地となり、明治三十二年八月大火後之を廢し、今は富山ホテル等數多の料理屋軒を並べ、盛況を極めて居る。

神通舟橋遺阯　諏訪川原通から船頭町に向け、北行すると廢川地帶に八間幅の新道路がある。大正十一年迄は此所に長さ百五十間、幅四間五尺の一大木橋があつたのである。此の橋は明治十五年に始めて架設されたもので、其の以前は越中三奇橋の一として名高い舟橋であつた。慶長元年前田利家交通の便を計り、始めて神通川に舟橋を架けたものである。其の構造は舟六十四艘を繫ぎ、船の上には橋板三枚を縦に排列した。慶安二年に至つて二條の鐵鎖を以て之れを連結したものである。文化四年には敷板を

五枚とした。其の狀虹の如く越中名勝の一として世に名高かつたが、時勢の進運に連れて明治十五年此の舟橋を撤して神通橋を架け、廢川地帶となつてから更に新道路に變更されたのである。

招魂社　市の西端富山驛から西南へ約十二町磯部町にある。本縣出身で靖國神社に合祀せられた、二千七百三十五柱の殉國烈士の英靈を祀つてある。境内四千六百五十三坪、本殿、拜殿、神饌所、社務所等結構壯麗參拜者日に絶えない。社地は延寶八年富山二代の藩主前田正甫の造營にかゝる磯部御庭阯で、社前道路の西側には櫻樹枝を連ね、社後磯部神社河畔堤上の櫻樹と共に一勝區をなし、花時の雜沓甚だしい。

磯部御庭遺阯　前田正甫時代の重臣近藤善右衛門の邸は磯部にあつたが、正甫はその邸に生れたのである。鎭守は鹿島神社であつて、正甫幼時より之を尊崇し、元祿十五年社殿を改築した。此の社を中心として一大庭園を設けられたのが磯部御庭である。今は近く神通の清流を隔てゝ翠黛滴るが如き吳羽山を眺め、東南遙かに立山連峰を望み、風光絶佳の地を利用した庭園を作つたのである。琵琶湖、富士山を模造したなど當時の盛觀思ひやらるゝも、正甫死去の後永く荒廢して今は社の境内に富士山の遺阯を存するのみである。

吳羽公園　市の西方郊外富山驛から約十町餘にある。牛嶽山脈の餘派で海拔二百六十四尺山上の眺望絶佳、東は日本北アルプスの主峰立山、劍嶽の天空高く峙つを仰ぎ、北方富山灣縹渺として近く能登半島を雲煙の間に望む。瞰下すれば神通の清流白砂を展べた如く模糊の間を流るゝほとり、富山市街の發達するを見る。加ふるに諸處に梅林や桃櫻があり、冬はスキー場として殷賑を極めて居る。此の如く天然の一大公園で、而も史蹟及名勝に富む。豐臣秀吉の陵阯。佐々成政の剃髮した道心山等あつて、花期はもとより四時遊覽の客が絶えない。明治四十二年には東宮殿下行啓あらせられ、大正十三年には秩父宮殿下立山御登攀の途次御成になつた。昭和二年からは道路一帶に電燈を點じ、公園口の溫泉場吳仙閣を始め、山上に軒を並べた多くの旗亭に盛んに遊客を呼んでゐる。尙山上に藥業界の恩人前田正甫公の銅像が建てられて居る。

長慶寺　吳羽山の東半腹にある。此の附近は往時櫻谷の一目千本とて櫻の名所であつた。殊に庭内に老樹多く、其の中に一重八重咲分けの名花がある。長慶寺は日輪當千禪師の開基でもと眞言宗であつたが、今は曹洞宗に歸して居る。境内五百羅漢の石像は有名なもので、中には頗る精巧なものもある。同寺は明治三年合寺の厄に合つたが、同三十五年堂宇庫裡を再建するに至つた。花時は遊覽の客が多い。

長岡廟所　富山驛から西南約十五町吳羽山の北脚長岡山にある。老松古杉鬱々とした勝地、舊富山藩主前田氏歷世の墓地で、藩祖利次を始め累代の御廟所である。各廟は結構壯麗で苔蒸した花崗岩の燈爐が六百餘基參詣路に並列して居て、自ら參詣者の襟を正さしめる。毎年八月八日に祭典を擧げ、同夜は献燈に悉く火が點ぜられ頗る盛賑である。

白鳥城阯　吳羽山の南方にある最高峯で、其の麓に白鳥宮があるから白鳥峰といひ、城阯であるので城山ともいふ。天正十三年八月豐臣秀吉兵十萬を率ゐて來り、佐々成政を征伐した時、本陣を此處に置き富山城睥睨した。成政その勢敵し難きを知り、遂に出でて降つたといふのである。

眞宗大谷派富山別院　市の中央總曲輪にある。富山城阯三の丸の地である。明治十三年三月の創設で、

初め本山說教所と名けたが、同十七年十月別院格に進み、今の名に改めた。明治三十二年八月大火に罹り、同三十三年に堂宇再建、漸次其の規模を擴張して來た。

眞宗本願寺派富山別院　總曲輪で大谷派別院の直ぐ東にある。元豊川町にあつて本山會所と稱したが、明治十二年十一月說教所と改め、同十四年八月富山城趾の東外堀を埋立て三ノ丸にかけて、現今の總曲輪敷地に移つた。十七年九月別院格に進み、現今の名に改めた。同十八年及三十二年の兩度の大火に際し類燒、假本堂を建築したが、大正十五年四月現本堂を新築し、輪奐の宏壯なことは北陸第一であらう。境內には德風會館、富山消防組の記念碑がある。

富岩運河と東岩瀨築港　東岩瀨港は富山灣岸の中央に位し、港口は俗稱「アイガメ」と稱する局部的深海が橫はつて居る。從つて短かき突堤の築造により能く港口の水深を維持することが出來る。且日本海航行者の最も恐怖する、北西の强風波浪を蔽遮し得て船舶は安全に碇繫することが出來る。

其の上今度築港第一步として河身を西方に變更し、河口と港域とを分離して、愈々第二期修築工事へと計劃工事進行中であるが、港內は面積廣く大船巨舶の出入に適し、後方里餘にして富山に至る。臨港鐵道、飛越線等の完成の曉は、名古屋方面より本港に達する距離、伏木港のそれよりも十餘哩近く何れの點より考慮するも、本港は良港たる素質を持つて居る。加之富岩運河を開鑿し、港內を浚渫し、港灣設備を完成せしむれば立派な港となり、又沿岸一帶は電力の消化地工業地域として異數の發達を遂ぐるであらう。富山市は廢川地內に運河船溜場を築造する筈であるから、汽艇孵船の往來頻繁となり、貨物の輸送費を節減し、得其の結果諸種の工業勃興し、盛んな商工都市を形成するであらう。即ち富岩運河は東岩瀨港發展の運命を握り、富山市百年の大計を立つる基礎となれり、沿線一帶產業の開發を計る重大なる使命を有するものである。而して富山市の關門には三十余萬坪の廢川地を有し、之が埋立は運河開鑿の不用土砂を利用すれば、一擧兩得である。

今や富山市都市計劃事業として、神通川廢川地處分と同時に富岩運河開鑿を、昭和三年度より五ヶ年計劃として着手して居るので、其の完成と將來の發展は期して待つべきである。

都市計劃

富山市は東と北に發展性を持つて居る。之は西は神通川を以て其の發展勢を妨げて居るのと、水の惡きことに起因し、南は經濟的に活潑なる關係少きが爲めである。東及北は水極めて良好にして近時新築家屋が俄かに增加して來た。北は東岩瀨港及藥專並に高等學校との關係が、學術的に經濟的に關係密接なるためである。

都市計劃の區域として左の村を編入した。

婦負郡東吳羽村、神明村

上新川郡堀川村の一部、山室村の一部、新庄町、奧田村、大廣田村、豊田村、東岩瀨町

街路網　遠からず東岩瀨地先より運河を設けて本市との連絡を計り、將來其の沿線を工業化せんとする計劃あるを以て、本市の街路網計劃は兩市町を結ぶ東岩瀨線、牛島線、櫻町太郎丸線をもつて南北の幹線として、之に配するに東西の幹線たる吳羽線、總曲輪線、新庄線を以てし、之等を基準として計劃區域內外の地勢その他に鑑み適當に道路網を作り、斯くして得たる路線數三十五、其の延長三萬七千餘

間である。

運河　東岩瀬港南端より富山高等學校西側を經奥田村を過ぎ、廢川地下流に於ける船溜に到達する、延長約二千五百間の地に水面三十三間半乃至二町三間半の閘門式運河を開鑿し、其の掘つた土砂は廢川地埋立に利用する。

公園　富山市愛宕新町、安野屋町の一部を整理する約一萬六千坪の地域である。

實施事業　街路新設事業は廢川地内に於ける都市計劃、幹線道路、及之と在來道路との連絡上必要なる廢川地域外に於ける都市計劃幹線街路網の一部と、運河新設及土地整理事業とを昭和三年より七年に至る五ヶ年に至りて實施する豫定である。

事業費總額　四百拾萬圓

街路　七拾五萬圓

運河　百九拾五萬圓

其の他の土地整理百四拾萬圓

街路の新設及擴築並に位置及幅員は次のやうである。

(1)大手線

總曲輪四百八十六番地先より市役所前を經て、越前町三十一番の一地先に至るの路線幅員十六間乃至十七間。

(2)富山驛前線

神通町字瀬跨より富山驛前を經て櫻町神通廢川敷地に至るの路線幅員十二間。

(3)總曲輪線

安野屋町字石揚割より諏訪川原、舊城址南側、泉町、清水町を經て山室村清水字前田に至る路線幅員十二間。

(4)富山驛根塚線

新富町より分岐し神通川廢川敷地、舊城址西側、總曲輪及千石町を經て堀川村根塚字島田割に至る路線幅員十二間。

(5)櫻町太郎丸線

一等大路終點より神通川廢川敷地及木町を經て、堀川村太郎丸字伊知免割に至る路線幅員十二間。

(6)牛島窪線

牛島字荒田より神通川廢川敷地を經て、奥田村奥田に至り富岩鐵道線路を横切り奥田村窪に至るの路線幅員十間半。

(7)愛宕稻荷線

神通町字中挾より神通町神通川廢川敷地を經て、奥田村稻荷字位居田割に至るの路線幅員十間半。

(8)吳羽線

一等大路起點より新大橋練兵場北側を經、藤子に於て國有鐵道飛越線路を跨き五福に至り、國有十一號に接續するの路線幅員十間半。

(9)新　庄　線

一等大路終點より山室村館出に至り富山鐵道線路を跨き、新庄町新町字新屋敷東割に於て左折し同町新庄字祖父附立割より、國道を同町新庄字中挾間東割に至るの路線幅員十間半。

(10)清　水　線　幅員十間半

(11)磯　部　大　泉　線　幅員十間半

(12)太　郎　丸　線　同

(13)磯　部　線　同

(14)牛　島　線　同

(15)東　岩　瀬　線　同

(16)大　町　線　同

(17)赤　江　線　同

(18)窪　大　泉　線　同

(19)奥　田　線　幅員八間

(20)上　富　居　線　同

(21)長　江　線　同

(22)山　室　線　同

(23)布　瀬　線　同

(24)有　澤　線　同
(25)寺　町　線　同
(26)馳　越　線　同
(27)石　坂　寺　江　線　同
(28)五　福　線　同
(29)五　艘　下　野　線　同
(30)中　島　線　幅員六間
(31)小　泉　線　同
(32)今　泉　線　同
(33)金　屋　線　同
(34)田　刈　屋　線　同

四、高　岡　市

第一回國勢調査　三六、六四八人
第二回國勢調査　四二、六六〇人

人口昭和三年末四万六千富山市を距る西方六里小矢部川下流に位し、本縣西部文化の中心をなして居る。此の地方は元關野といつて荒凉たる曠野であつたが、慶長年中前田利長が築城してから高岡と改めたので、其の時各地から集めた商工業者と家臣等で立派な城下町を作つたのに創つてゐる。後廢城となつたが射水、礪波の肥沃なる平野を控え伏木港との開には小矢部川があつて、水運の利があり陸には道路四方に通じて、交通運輸の便がよいので住民は他に轉ずることをせず、此の地に止り專ら商工の地と

して發達して來たのである。後陸には北陸線が通じ更に中越線によつて伏木を外港とすることを得て、盛々交通運輸の便が備つて來たので一層市況を賑はすやうになり、今日は全く商工業都市となつたわけである。それで今日市民の氣分を覘ふに、比較的活氣に富み且機敏で何事にも進取的である。殊に本縣は久しく農業を以て全國に名を得たのであつたが、大正十年を境として工產額は農產額を越えてゐる。豐富な電力を持ち海に伏木港を、控え陸上の鐵道は各地に四散して交通が便であるから、將來本縣が工業縣として名をなす時も亦遠くはあるまい。前田藩主の奬勵によつて漸次發達して來た、銅器、鐵器、漆器等の產額はなか〳〵多く、殊に銅器は全國的に名を得て近年の產額二百五六拾萬圓に達してゐる。又從來の家庭的工業の外市の北部及西部の方面には紡績工場、ゴム工場等各種の工場が出來一工業區を現はしてゐる。殊に市の都市計劃が完成する曉には、水陸交通は一段の發展を來すであらう。市內には區裁判所、稅務署、警察署等の官衙を始め高等商業學校、各種の中等學校、工業試驗場、圖書館、貴賓館等もある。舊城趾は明治八年七月から市の公園となつてゐるが、地域廣く中には老松枝を交え、周圍は深い濠を以て巡らし、杉林の中には國幣社射水神社がある。又前田利長碑、稻垣氏の銅像等が建てられて居る。西北にには二上山及富山灣を望み規模の大と形勝の優とは全國公園中屈指さるゝ處である。殊に市の名所である。櫻馬場から引續きに近年櫻を移植したので一層の情趣を添へてゐる。又市內には山車で有名な關野神社がある。下關には前田利長の墓があり、附近には前田氏の菩提寺として建立せられた曹洞宗の巨刹瑞龍寺がある。此の寺には寶物が多く佛殿は特別保護建造物として指定せられてゐる。

高岡城趾　市の東方にあつて慶長十四年前田利長が、加越能三州中の形勝を卜して經營したもので、山海の險岨には據らないが、高垣深濠で要害堅固無双の名城と稱せられた。元和元年廢城以來荒廢に歸し承應の頃藩倉を納め來つたが、明治維新の後之を毀ち同八年七月公園とするに至つた。

高岡公園　高岡城趾で規模宏大、風光絕佳である。面積六萬三千有餘坪、四邊の深濠は今も殘つて居て、碧を湛え古色蒼然寺松楓樹鬱々として枝を交へ、櫻桃その間を綴つて居る。園內到る處眺望に富み二上山及富山灣を望むの邊は景致殊によく、四時遊覽の顧客が絕えない。射水神社は其の中央に鎭坐し前田利長碑、稻垣氏の銅像がその間に建てられて居る。近く城廓公園として內務省の指定を見んとしてゐる。

射水神社、元、二上山の麓にあつたが、明治八年高岡公園の本丸趾に遷坐せられた。國幣中社で祭神は二上神といひ、養老元年僧行基が二上山に養老寺を創むると共に之を勸請したので、寶龜十一年に從五位下それより累進して貞觀元年には正三位に叙せられた、延喜式には大社に列せられて居る。古來越中四郡を氏子とした。境內老樹鬱蒼、淸風常に紅塵を拂ふの淨地で、明治四十二年十月東宮殿下高岡に行啓の際本社に勅使を差し遣はされた。

櫻馬場　高岡驛の前面から北に一直線をなして、高岡公園に至る間櫻樹の並木がある。之が櫻馬場公園である。慶長年間前田利長高岡在城の時騎射場として、長さ二百七十六間幅九間の馬場を設け、西側に多くの櫻樹を植付けたが、延寶年間に至つて枯樹が多く出たので藩は之を補植し、明治維新の際一時荒廢に歸せんとしたが、同二十三年四月市に之を買ひあげ同三十五年から之を公園とすることになつた。毎春花盛の候には觀客の踵を接して來り賞するものが多い。

高岡關野神社　市内堀上町に鎮座せる縣社で、大正八年九月關野神社と高岡神社とが合祀せられたものである。高岡神社は元、稻荷社と稱へられ慶長十五年三月前田利長の高岡城内に祀られたもので、承慶二年同利常關野神社境内に之を遷して社領十二石五斗を寄進し、明治に至りて利長の靈を合祀し、同十一年九月高岡神社と改め、同十二年十二月縣社となつた。又關野神社は元、熊野社と稱せられ古は射水郡水戸田にあつたが、後關野に遷坐せられ高岡築城の時から城下三十一町の產神となり、享保十一年關野神社と改稱するに至つた。明治五年九月鄕社に列せられた現今の社殿は大正十年の再建に係るものである。毎年五月一日に大祭を執行せらる。神輿渡御は實に開市以來の名物である。曳山七臺が市中を巡る、此の曳山は嘗つて前田利家が豐臣秀吉から與へらた、聚落第の遺物で造つたもので、金色燦爛桃山時代を偲ばしめるに足るものである。

五、伏木港の現在及將來

伏木港は其の昔布施の港と稱し、聖武天皇太平四年田中年臣越中守に任ぜられ越中國司となるや、伏木港に駐して越中全土を司配し、天正十三年加賀藩の治下となり寛永年間幕府は內國十三港の一として指定し、船政所を置き愈々伏木港として貫錄を備へ天保、弘化の頃に至り、佐渡大阪に開航してより急速に發展し、斯くて明治維新に入り航路發展の一大曙光とも見るべきは、明治八年東京三菱汽船數隻の入港を見るやうになつた事で、北海道及大阪、馬關等の航路益々頻繁を加へ、遂に明治二十二年特別輸出港に指定され、越えて同二十七年沿海州サガレン島及朝鮮との特別貿易港となり、日と共に海運業者密集し軒を連ね其の業覇を競ふに至つた。之即ち彼の日清戰役直後自然に同港の進展を促進せしめたるが爲めである。當時內務省は同港の看却すべからざるを思ひ、庄川改修工事一部事業として伏木港の修築に着手し、大正元年遂に其の工の峻成を見た。斯くて三千噸級の巨船は悠々內港深く雄姿を現はし棧橋に繫留し得るやうになつた。更に棧橋及繫船壁に軌道を敷設して、以て中越線と連絡せしめ貨物の集散愈々便利となり、隨つて著しき進展を見、大正十一年に至り遂に重要港灣として名實共にあらはるゝに至つた。昭和二年度に於ける貿易總額六百五十萬圓（輸出十七萬圓、輸入六百三十三萬圓）を算し之を大正六年のそれに比較すると五十三割の增加を示して居る。之を以て見るも同港の急轉的進境は實に驚くべきものがある。しかも第四十九臨時帝國議會の協贊を經た、十二ヶ年繼續の大擴張工事は目下盛んに施行され、西岸に棧橋二基と東岸に廣さ六千坪の船渠を增築し、水深二十四尺乃至二十八尺、六千噸級二隻、四千噸級五隻、二千噸二隻が同時に接岸荷役し得るもこゝ數年後の事である。殊に同港は自然的に地の利を占め東に北アルプスの峻峰を仰ぎ、北は富山灣上近く雲煙の中に能登の翠巒を眺め遙かに遠くシベリヤの寶庫に對し、南に越中の大平野を控え關東關西からの鐵路亦極めて便であり。而して北海道の各港を主要相手として、樺太或は沿海州、滿鮮その他南支、英領諸島及北米からの貨物を呑吐し、現港勢裏日本各港に冠絕して居る。近き將來には同港を中心とする新湊、氷見、高岡方面一帶に亘る發展が目覺ましいものであらう。

定期航路

北海道航路

伏木小樽線

伏木稚内北海道西岸線　六回
伏木函館室蘭線　五回
伏木新潟、函館、釧路、根室線　三回
伏木函館線　七回
伏木根室線　二回

樺太航路

伏木、小樽、大泊、本斗眞岡、野田、泊居、久春内、惠須野線　五回
伏木、新潟、大泊線　二回
伏木、新潟、小樽、大泊、釜山線　二ヶ月三回
伏木、敷香、樺太東海岸線　月二回
伏木、小樽、大泊、樺太西海岸線　一回

内地航路

伏木、船川、門司、下關線　二回
伏木、門司、八幡、下關線　二回

北鮮浦汐大連航路

伏木、七尾、浦汐　二回
城津、清津、元山線　二回
伏木、新潟、函館、小樽、浦汐　三回
伏木、敦賀、舞鶴、下關、釜山　三回

港灣の狀況

(イ)面積　小矢部川左岸突堤にある燈臺を中心として、半徑一哩半を有する圓弧内の海上及小矢部川口より上流千七百三十三間の地點、即ち城光橋に至る間を港區として居る。

(ロ)水深　伏木町沖合は海岸より二百間を隔てた地點が二十尺内外で、約千間の處は水深五十六尺である。新湊町六渡寺海岸は二百間の沖合で七十尺より百五十尺で、庄川沖合三百間の處は俗稱藍甕と稱する深海部で、水深千尺内外に及んでゐる。

(ハ)設備　左岸防波堤は延長百三十六間、先端に燈臺があり。右岸は防波堤延長百十七間である。棧橋、左岸は延長百二十七間幅二十四尺、水深二十一尺五寸縣營のもの、右岸は延長二百二十九間、水深二尺七寸乃至三尺七寸會社又は個人の經營で、小船の荷役用に使用されて居る。

繫船岸　左岸壁延長百二十間、水深十六尺五寸で千噸級の汽船横付す。右岸壁は延長二百三十一間水深十六尺五寸で千噸級の汽船横付す。

浚渫　小矢部川の河口港にて土砂の沈滯する爲め、大正元年八月より年約三萬六千坪内外(縣營)の土量を浚渫し、既に全量四十萬坪を浚渫し、尚大正十一、二年に且つて内務省新潟土木出張所より浦賀丸、大阪丸を借受けて浚渫に努力した。

(ニ)港灣の交通連絡　鐵道軌道、左岸繫船壁に沿ふて延長四百七十五間、右岸には百六十間の軌道を敷設して伏木驛にて本線と連絡し、本港出入貨物は當港より四哩五分を距る高岡を經て、各地に輸送せらる。更に飛越線の全通、七水鐵道の開通中越線の複線計劃、四方鐵道の新湊延長工事完成、伏木高岡

間の電氣軌道認可申請等の實現は對岸大陸貿易に、時間的にも經濟的にも好結果を齎し、本港の發展見るべきものがある。

（ホ）高伏運河　資本金五百萬圓、千保川に沿ふて能町村米島地先で一部を改修し、其處に繫船岸壁を設け、延長約一里餘。沿岸には荷揚場、道路、軌道、上屋、倉庫等を建設し其他工場地帶となす目的のものである。

六、聚　落

有　峯

藥師岳の中腹にある、盆地で上瀧町から山路八里、飛驒國との境に横はる山奥にある塞村である。もとは約二十戸の家に百餘人の人口があつたけれ共、今は何れも廢屋となつて只其の中の二戸のみに十餘人の人が住んでゐる丈けである。

此の村は天正の頃、中地山の城主川上忠務の臣が上杉謙信に攻められこの地に逃げ住んだのに始まり、それから以後他郷と一切交通せずにゐたから、風俗は至つて純朴で木の實や稗等を常食としてゐて、迷信が多く男女の服裝などにも種々奇習がある。

此の村を中心として附近一帶は全村共有の大森林であるが、先年之を縣に賣却した。各戸一萬圓以上の大金を得た爲め村民は各地に轉住して、今日の如く廢村と化し將に絶滅に頻してゐる、しかし藥師登山客の根據地として立ち寄る者が殊に夏は多い。

五　ケ　山

城端井波町の關門から約三里郡の南部庄川の上流に點在せる山村で赤尾谷、上梨谷、下梨谷、大谷、利賀谷の五つからなつてゐるので此の名がある。今は平、上平、利賀の三村に分れて居る。養蠶、製紙、苧、石灰岩を產する。氣候及地勢の關係から米作には適しないから、住民は粟、稗等を常食としてゐたが、今は次第に米を常食とするやうになつた。古、平家の落武者が隱住したので其の子孫だと稱せられて居る。舊幕時代は罪人の配流地であつた。庄川の沿岸は奇岩怪石多く激流が之を嚙んで所謂幽邃絶壁の景趣が多い、平村松尾の高原中には一巨岩が恰も大象の天に上らんとするに似てゐるので、天柱石といはれ五ヶ山の一奇觀として名がある。又五ヶ山の山地にはとちの木の繁茂多く、中には天然紀念物として、指定せられて居るものもある。

七、其の他の主なる町

中　新　川　郡

西水橋町　人口三〇〇〇、東水橋人口四五〇〇富山市より、東北三里鐵路三十分で白岩川の流がある。此の川の東にあるを東水橋といひ、西にあるを西水橋といふ兩町共に舟泊の地で漁業が盛んであるが、殊に近年太刀魚の豊漁で名高い。尙水產製造品として、干鰛、蒲鉾等を產するが賣藥の產額特に多く、年額三百萬圓に達する。此の外竹木製品の產出も多く籐表の製造も漸次進歩しつゝある。尙附近より遠く樺太やカムチャッカ方面に出稼する者が甚だ多い。此の町は舊常願寺川口にあつたので北陸交通の要路に當つてゐたから、本縣の最も古い驛である。

滑川町　人口一〇、〇〇〇滑川町は立山鐵道の起點で、北陸線に於ける一要驛である。舟の出入に便よ

く漁業亦盛んで、烏賊の黒作り、螢烏賊の金波糖は古來此の地の名產として名高い。此の賣藥等の產額も年二百八十萬圓に達する。越中有磯海の二大奇觀として天下に有名である螢烏賊と蜃氣樓は此の邊一帶の奇觀で、特に本町と魚津は名高い。

上市町　人口五〇〇〇、富山市の東方四里で、滑川町より東南に二里の地にある。立山鐵道の一要驛である。古來機業が盛んで羽二重の產出年四十五萬圓の產額を有す。殊に近年は賣藥製造が盛んになつて、年百十四萬圓の產額に達して居る。町民及附近の村落より行商に出かける者も非常に增加した。

五百石町　人口三七〇〇、富山市の東南約三里の處に五百石町がある。立山鐵道は上市町より來て更に岩峅寺にて縣營鐵道と合して居る。此の邊一帶は元荒蕪の地で高原野といはれて居たが、文政の頃栃木五左衛門氏が藩の許を得て開いた處である。町の中央に今も尙一本の巨松の存するは昔の面影である。町勢は餘り盛ではないが、近時賣藥組合等が出來て次第に活氣を呈して來た。

下新川郡

魚津町　人口一四〇〇〇、富山市から鐵路約四十分で魚津町に至る。此の町は古來富山市及高岡市と並び稱せられた縣內の名邑で、海岸は船舶出入多く陸路は北陸線の主要驛で、又各地との間自動車の往來繁く市街の繁華な事は郡內第一である。此の町の物產は膳、椀、重、茶櫃、佛壇等の漆器を始め水產物、織物、淸酒等で年々產額を增して居る。殊に漆器は堅地塗を特徵として販路次第に擴まり、今や輪島塗を壓倒せんとしてゐる。

又此の地は鯛の名產地で毎年五六月は其の盛時であり、鯛網を曳く樣頗る異彩を放つて居る。又魚津は蜃氣樓で有名である。毎年春夏の候天穩にして風凪ぎ氣溫急に上昇を感ずる頃、遠く岩瀨方面から伏木、氷見方面にかけ、或は對岸一帶の海面から遙かに能登方面にかけ、更に生地の沖合附近に至る迄殆んど海上全面に亘り、水面近く之が出現を見るを常とする。或は橋梁、森林、樓閣の樣なものが忽にして明滅し、本邦では他に稀に見る現象である。

三日市町人口三八〇〇、魚津町の北方二里餘りで三日市町に出る。此の町は郡の中央にあつて、古來交通上の要所で、北陸街道は此處から下街道と上街道とに分れてゐる。近年黑部峽谷の開發を使命として生れた黑部鐵道は、本町を起點として遡ること十哩宇奈月に達してゐる。此の地方は往古は櫻井庄といつて佐野源左衛門常世が最明寺入道時頼から受領した三里の一だと傳へられてゐる。

生地町　人口六五〇〇、三日市町を過ぎて西北に約一里海岸に發達せる町で、町民の生業は主として漁業で近年は淸酒、醬油の產出も少くない。又海岸は鎗ヶ崎の突出に依つて北風を遮るから、比較的に海面は靜かで舟泊には至つて便である。それで北海道、佐渡、魚津、新湊等への海路が開けてゐる。尙附近の漁民は毎年遠く樺太、北海道方面へ出稼する者が年々其の數を增し多大の收益を得て歸る。

舟見町　三日市町かから上街道を通り、黑部峽谷の關門に架けられた愛本橋を渡り、更に一里餘にして舟見町に達する。

此の町は黑東部の東南臺地にあつて、德川時代參勤交代の際加賀藩は本街道を通りたる爲め、當時は非常に殷賑を極めたものである。今は甚ださびれて昔日の面影だに止めないが、炭酸泉を以て有名な鑛泉がある。

入善町　人口三〇〇〇、三日市町より下街道を東北二里餘歩むと入善町に至る。此の町は黒東平野の中樞をなして居る。古くからの都邑であるが泊、生地、三日市町等に勢力を取られ、あまり繁盛ではない。有名な黒部西瓜の集散地である。

泊町　人口五三〇〇、飛驒山脈の支脈、立山山脈が定倉山となつて日本海に沈まんとする處で、本縣最東の町である。三日市町で岐れた北陸街道は此の地で合して一筋となり、新潟縣に通ずる唯一の國道となつて居るので、古來新潟縣との交通上に於ける關門となつて居る。

北陸線が開通してから町勢は稍衰頽の傾があつたが、小川の上流山崎村にあつた小川溫泉が、數度の水害にかゝつて遂に此の地に移りしより、浴客の來り集るもの年々增加するので、近頃は町勢を挽回した。而して今は附近農產物の集散地たるばかりでなく、漁業の中心地をなして居る。

尙此の附近の村落から漁民の北海道方面に出稼するものが多い。町內には明治天皇の泊行在所があり、又宮崎村には泊城阯がある。幕末の志士加藤謙二郎は此の出身である。新潟縣との境なる境村には境關阯がある。

境關阯　今の境村小學校附近は其の阯で、越中、越後の境界である境川は古、神濟川と稱した。慶長十九年大阪冬陣の時國境要害の地となして、前田利常幕府に請ひ關所を設した。是より先、慶長十一年前田利長富山城に老を養ふや、從臣中に境口番長谷川宗左衛門といふ者があつた其の頃から、既に關所を置かれたものと思はれる。藩治の初に當り製鹽業が起り、關所が之を監督したことがあり、寛政五年頃に三千五百俵の製鹽があつた。明治初年に關所は廢止せられ、製鹽業も亦廢絕するに至つた。

婦負郡

八尾町　人口六一三九人富山市を距るこ西南四里本郡南部唯一の都邑である。

附近一帶の地方は縣下第一の養蠶地で、此の町は其中心をなして居る。從つて町には生糸、繭、蠶卵紙等の取引が主なるもので、蠶卵試驗所もある。紙及眞綿等の產額が多い。

又附近の村落及此の町からは、信州及上州方面へ製糸工場の女工となつて出稼する者が甚だ多く、其の收益は地方經濟上の一要素をなして居る。殊に飛越線の一部開通してより町は一層賑やかになつた。而して其の發展は漸次隣接の保內、杉原の兩村にも及んでゐる。

四方町　人口五二〇〇、神通川新大橋(聯隊橋)詰から四方行電車に乘れば二十分餘にして富山市の北方二里、四方町に至る。此の町は元は淋しい漁村であつたが、漸次發達して今日に至つたもので、漁業も賣藥とは其の主要產業である。近年は隣接の打出濱と共に海岸には海水浴場の設備が出來たので、夏日の浴客の集るものが甚だ多い。

射水郡

小杉町　人口五二〇〇、富山市から西方三里、富山高岡兩市の間に於ける北陸線の主要驛である。古來八尾、新湊、東岩瀨等郡內は勿論縣內交通上に於ける重要な位置を占めてゐたので、舊藩政時代には驛馬の設けられた所である。

庄東平野の中央にあつて、附近農產物の集散地で、又此の地方經濟の中心をなしてゐる。此の町には奧州相馬より其の製法を傳へられた小杉燒がある。當時は盛んに出されたものであつたが、今は昔の面

影を止めるに過ぎない。幕末勤王の志士藤井右門は此の町の出身である。

藤井右門の碑　小杉驛附近にある。右門は小杉町に生れた幕末の勤王家で、竹内式部、山縣大貳等と共に幕府を顚覆し、皇室を復興しやうと謀つたが、現はれて明和四年八月二十一日死刑に處せられ、鈴ヶ森に梟せられた人である。明治四年十二月十七日特に正四位を贈られ、同四十二年小杉有志が此の碑を建てた。同年十月東宮殿下北陸御巡啓の際墓前に御使を派遣された。

新湊町　人口二三〇〇〇、小矢部川を挾んで伏木町に對して居る。上古は奈古浦といつて奈良朝時代に既に北陸屈指の都邑であつたが、其の後兵火に罹り海潮に浸された事などあつて廢れた。明治の初め頃伏木町と合併した事もあつたが、二十二年に又分離して今日に至つたものである。附近一帶漁業が盛んで住民の中には樺太、北海道方面へ出稼する者も多い。水産物の漁獲高は年額百二十萬圓を下らず鹽、乾鰛、鰛搾粕、蒲鉾、鹽乾鱈等の水産製造物の産額も又八十萬圓の年産額を示してゐる。近年新湊線開通し、又伏木港の水上の便あるとに依つて市況著しく活氣を增して來た。殊に六渡寺、中伏木、吉久の附近は對岸伏木町と相對して工業方面の發達急速で、製材、肥料、製鐵等の工場は小矢部川右岸に並び建てられて居る。

尙中伏木方面には貯炭場、貯木場の設備が出來てゐるし、富山市からは近く電車も開通する筈である。將來此の地方が伏木と共に高岡市都市計劃區域に入つて居り、北陸に於ける一大工業區となるも又遠い將來ではあるまい。町内には射水中學校、商船學校、放生津八幡宮等がある。尙海岸奈古浦は風景がよいので、古くから詩歌に詠まれてゐるし、放生津潟は蜆鰕等の産するので有名である。

放生津潟　新湊町の東端にある。往昔は越湖といつて新湊町、牧野村、片口村、堀岡村の間に介在する渺茫たる大湖であつたが、次第に埋つて田地となり、今は周圍一里二十町餘、湖中蜆、鰕、鯉、鮒等を産する。湖心に一小島がある。鼈島又は海龍島といつてゐる島上に辯財天の祠がある。毎年七月三十日祭事を湖上で行ふが、當夜は數百の煙火空に輝き、火光が湖面に映じて非常に美しい。湖の東に足洗潟といふ一小湖があつて、又水路を通じてゐる。

氷見郡

氷見町　人口一五四〇〇、三方山に圍まれて、東方の一面のみ海に臨んでゐる。風光明媚、又越中古代の文化發祥地として名あり、氷見郡唯一の都邑である。古來他の地方との中心都邑となつてゐた。後高岡市との間に海老坂峠を切り拔いて行程三里半の道路が開け、近年又伏木町から氷見線の開通を見たので、陸上の交通は非常に便利になつて來た。又能登、七尾間は鐵道敷設の豫定がある。海上は比較的波が靜かで舟泊に便である。沿岸一帶の各地とは汽船の連絡交通がある。

港は縣下唯一の漁港として修築工事中である。從つて近年町勢頓に振ひ、人口亦年々增加して、縣下第四位の都邑となつた。此の地を中心として沿岸一帶は水産が多く、年産額百萬圓以上に達し、氷見鰤の名高く遠く關西各地の市場を賑はしてゐる。殊に最近は本町を中心として水産製造の業が盛んになつて、年産額七十五萬圓に達する。其の他町内各地に縫針製造の工場多く、産額も又多い。又郡内各産業の發達と共に米、藁工品、蘭莚等物産の集散地として郡内經濟の中樞である。

町には縣立高等女學校、氷見中學校、農會立農林學校もある。又眞言宗の巨刹上日寺は眺望絶佳の地

朝日公園の山麓に建てられ、寺庭の公孫樹は我國古木の一として天然記念物に指定されてゐる。

尙附近に先住民族の貝塚もある。

朝日山　氷見町の西方にある、丘陵で頂上に登れば富山灣を一眸に萃め眺望快濶で風光も極めてよい。明治四十一年に日露戰役記念として神武天皇銅像を建て、又四十二年行啓記念として土地を買收し樹木を植える等大に修理を加へて記念とした。

朝日貝塚　大正七年國泰寺別院誓度寺を建立の際發見されたもので、氷見町朝日字馬場にある先住民族の貝塚であつて土器、石器等を出す。積層は三尺許りであつて、地表及附近には土師質、土器片の散在を見る。特に此の地から先住使用の爐を發見した事は、斯界の珍とせられてゐる。

東礪波郡

出町　人口五三〇〇高岡驛から中越線に乘つて南方へ行けば出町に至る。此の町は礪波平野の中央に位してゐて本邦樞要の町である。

昔は庄川の范濫の爲めに一面の河原となつた事も屢であつたが、爾來幾多の變遷を經て今日に至つたもので、現在の町は元杉木新といつて、慶安二年に杉木宇兵衛の願によつて市場の開かれしに始まつたものである。麻織物會社や中越製布會社等もあつて、機業方面には近來長足の進歩をなしつゝある。尙附近の鷹栖村には礪波中學校がある。

福野町　人口四三〇〇、礪波平野の中央にあつて、出町から鐵道約一里半、中越線と私設加越線との交叉點で高岡、石動、井波方面よりの交通路集中點である。此の町も出町と同じく市場町の發達したものである。縣立農學校、染織講習所等がある。又加越鐵道會社、富山紡績會社があつて、產業の進歩を催進し特に工業の發達は著しく、織物の產額の多い事は西礪波郡の戶出町と相並んで、年額三百二十五萬圓に達してゐる。

城端町　人口四四〇〇、本郡最南の都邑で中越線の終點である。高岡市を去る事約七里で此處から更に南進して五ヶ山を過ぎ岐阜縣八幡に通ずる道があつて、五ヶ山への入口である。眞宗大谷派の別院善德寺がある。又薄絹の產を以て有名である。此の町は元龜の昔は淋しい一小部落であつたが後、善德寺が此の地に移つてから、全く宗敎的都市となり。更に絹織物業の次第に盛んになるにつれて、漸次市況繁華に赴き、今は礪波銀行、城端織物會社、城東機業會社等がある。

驛を距ること二町餘にして、多量のラジュームイマナチオンを含有する炭酸鹽類泉が出る。附近の大鋸村には林道鑛泉がある。尙此の町を距ること十五町の處に陸軍演習所として、又スキー場として有名な立野ヶ原がある。

井波町　人口五一〇〇、加越線福野驛から東へ三哩餘で八乙女山の麓に井波町がある。

此の町は嘗つて瑞泉寺(別院)を中心に一向一揆が起つて、同寺が礪波郡の大半を領有した頃は立派な城下町であつたが、其の後次第に衰へて今日に至つたものである。此の町も城端町と同じく五ヶ山への關門である。古來彫刻者の輩出多く、今日我國に於ける伽藍建築は實に當町出身者の手になる處である。物產には絹織物を始めとして、蠶卵紙や彫刻品がある。目下工事中の庄川水電の竣工を見れば本町は工業方面に一大發展を見るであらう。

瑞泉寺　井波町に在る眞宗大谷派の別院で、元中七年本願寺第五世綽如が、帝都の塵を避けて北國に下り、杉谷某の招によつて此の地に一小庵を結んだのが此の寺の始である。後小松天皇の勅願所である。綿如は四年の後此の地に寂し、後第八世蓮如北國に下るに及んで門徒靡然として之に集り、遂に一向一揆に化して兵馬の權を握り、本寺は其の根據地となつて城廓を構え、坊主、大名二十七人、坊號十八名、與力付大身五人、末寺は加越能三ヶ國で百七十ヶ寺の多きに及んだ。其の後佐々成政の爲めに、全滅し一時北野村に移つたが、天正十七年又元の地に再建した。寶暦十二年及明治十二年の兩度大火に遭ひ堂宇全燒した。然るに本堂及太子堂は其の後落成した。大門のみは寶暦年間の建築今に存じで、井波大工の有名な彫刻を示してゐる。本寺には聖德太子木像、繪畫傳八軸、綽如の勸進帳等寶物が多い。殊に勸進帳は明治三十三年內務省告示第五十八號で國寶に指定された。毎年七月の太子傳會には信徒が各所から雲集して大に賑ふ。

中田町　人口二九〇〇、本郡最北端の都邑で高岡開市以前よりの宿場、射水、礪波兩郡交通上の樞軸をなしてゐたものである。本町の西端は庄川の最も幅の狹い處で、そこに架してあるのが有名な中田橋である。本町の東南一帶は栴檀野（一名盤若野）といつて古來幾多の軍話を殘してゐる古戰場である。

西礪波郡

福岡町　人口二〇〇〇、高岡市から西へ北陸街道を二里餘行くと福野町に行く。承應年間に創設せられた町であるが、唐又岩渡の二川附近を流れ、地盤稍凹形をなしてゐる爲め、沼澤地が多くて米作には適せない處が多い。附近には菅を栽培して笠や蒲團を作り各地に販賣してゐる。近年又驛の附近には各種の工場建ち、工業方面に可なり發達してゐる。

石動町　人口八四〇〇、石動町は本縣最西の都邑、省線北陸線の主要驛で富山市からは二十一哩、金澤市からは、十五哩の處である。此の町は木舟城主前田秀繼が木舟地震のため、城を此の地に移したのに創つた町であるが、其の後廢城せられてからも石川縣との境には倶利伽羅峠があるので、其の麓の宿場として發達したものである。私設加越鐵道は此の地を起點とし、福野町を經て青島に至つてゐる。

礪波山　北陸街道加賀越中の國境に聳ゆる山で、一に倶利伽羅峠とも名づける。石動驛から西南一里半、倶利伽羅驛から一里餘りにある。

壽永二年五月十一日木曾義仲が火牛を以て平軍を夜襲し、之を南方の深谷に陷れた有名な古戰場である。平氏の陣地は源氏ヶ峰及猿馬場といひ、陷落の地地獄谷は又馳込谷と稱して居る。其の後承久の役には官軍の仁科盛遠、宮崎定範が北條方名越朝時を防ぎ、天正年間には前田、佐々の兩氏が對陣して相爭ふたのも此の山であつた。明治十一年明治天皇行幸の際安樂寺から天田越を經て、竹橋に至る新道を改修してから礪波山は古道となつた。明治四十二年十月一日先帝陛下行啓の際、此の地に御使御差遣になつた。

礪波關趾　埴生村石坂新村の南七町許に關畠又關野又關野谷內の名がある。それが古代の關趾であると言傳へてゐる。此の關は和銅六年に設けられ、越の三關の一に數へられた有名な舊蹟である。

戶出町　人口五〇〇〇、高岡市の南二里で中越線の一主要驛である。此の町は元和三年中條又右衛門なる者藩に願つて市場を開きしによつて出來た町である。交通便利の地で戶出物產會社、戶出織物會社

があつて綿織物を產し、年額百万圓以上に達する。又戸出麻布會社もあつて、入講布の遺業を繼いでゐる。要するに此の町は東礪波郡の福野町と相並んで縣の二大機業地である。

福光町　人口五二〇〇、本郡南部にあつて小矢部川の西岸に位し、高岡驛からは南方十五哩、經濟上の重要な中心である。此の町は元は城下町であつたが、現在の町は昔の市場をも併せてゐる。此の町を中心として附近一帶は製絲業が盛んで、年額七十萬圓に及び、其他蚊帳、五郎丸布、乾柿等の產もある。近時又玩具の產出盛んである。太平社、福光麻布會社、福光機業會社等がある。

津澤町　人口三〇〇〇、加越鐵道の石動、福野間にある要驛で、小矢部川の東岸に位してゐる。又一方小矢部川に臨んでゐるので、高岡及伏木方面に舟運の便があつて、本縣西部交通連輸上重要な地位を占めてゐる。物產の重なるものは紙、絹織物、漆瓦、煉瓦等で薄氷は此の地の名菓として譽れが高い。

八、地學上より見たる越中氷見の洞窟

歐羅巴では洞窟の調査は一の專門學科になつて居つて、洞窟學ともいふべきものがあつて專ら洞窟の事丈け研究して居る學者もある位である。然るに我日本には種々の地質に、種々の成因によつて出來た洞窟或は海の波の浸蝕作用に依つて出來た洞窟がある。即ち多くは石灰岩地方、時としては砂岩地方、時としては火山岩から成り立つた地方に、或は水の溶解作用に依つて出來た洞窟、或は海の波の浸蝕作用によつて出來た洞窟があるが、其の中からは未だ曾つて貴重な學術上の材料の發見された事は、今日迄の處では殆どない。仄かに聞く處では朝鮮の一洞窟から澤山な哺乳動物の骨が出たといふ事である。又山口縣の一の洞窟からアンテロープ、即ち鹿の齒が出た事がある。福岡縣企救郡松枝村の石灰岩地方からは象及犀の骨が出たといふ事であるが、之に對する學術的研究を見ない。然るに越中國氷見郡宇波村大字大境の洞窟から偶然にも今いつたやうな歐羅巴各地の洞窟に似たる所の發見があつた。之によつて日本の考古學上並に地質學上有益なる資料が與へられたのである。夫故ほんの一局部の洞窟であるが斯かる意味に於て日本では極めて珍らしい發見の事柄として、特に此所に記述を詳かにするわけである。

此の洞窟に就ては考古學上から、歷史地理の二十九號（大正七年十月一日發行）に上田三平といふ人の報告がある。又教育畫報（大正六年七月）にも松村瞭君の報告が出て居る。考古學方面の報告はそれ〴〵之等の難誌に載つて居るから、こゝでは主として地學上の見地から見た方面を記述する事とする。

氷見郡は越中の西北の隅であつて、其の中の宇波村といふのは特に氷見郡の北の方にある所の一部落である。此の邊の地形をいふと片麻岩の上を被覆する第二紀層の丘陵があつて、海拔二三百米突である。其の岩石は主に石灰質の砂岩から成立つて居つて、それがずつと海岸迄出て居る。海岸には殆んど沿海平地ともいふべきものがない。海岸から直ちに百米突内外の丘陵が起伏して居る。此の宇波村は東は富山灣に瀕して所謂長汀曲浦相連つて居る。殊に大境の部落は宇波村として、最も北の一の部落であつて、能登の境界に最も近い處である。其の洞窟のある處は小字駒肴といつて少しく東の方、即ち富山灣に突出して居る第三紀層の丘陵がある。其の洞窟の口即ち洞門は西南に向つて開いて居つて、其の前に幅二十間位の船着場がある。此の丘陵を構成して居る物は、其の地方の主なる岩石である餘り硬くない石灰質の砂岩であつて、七度乃至十度位の緩漫な角度を以て東の方に傾斜して居る。其の中は泥灰岩の圓い不規則な團塊扁桃狀の塊の多少層を成したものが挾つて居る。其の中には貝殼の化石が屢々埋藏

せられて居る。之は地質學上第三世紀の中新統から始新統にかけ多く出る Thyasira bisecta Conrad といふものである。之が深山に泥灰岩の團塊の中に埋藏して居る。從つて此の地方は第三紀層の中新統若くは其の以前の始新統に屬するものと思はれる。此の洞窟は海の波の浸蝕作用の爲めに出來たものであつて、其の形は圓天井形である。而して入口の高さは約八間、奥行が約廿間である。入口の方は高いのであるが、段々と奥に行くに從つて低くなつて居る。洞窟内は廣さ約四十坪餘あつて、其内には伊弉冊命を祭つてある白山神社があつて、前の方が拜殿で奥の方が本殿である。それから洞窟より少し外に鳥居が建つて居る。此の白山神社を增築するといふので、もう少し高さを高くする意味で床を削り取つて、削り取つた土を以て海面を埋めて陸地を突き出したのである。之を削り取つた時偶然にも一の石棒と人骨とを發見した。それが抑もの發見であつて、それから縣廳、警察署の人達や高岡の新聞記者達から大に注意され發掘を續けたのである。其の結果種々なものが出た。即ち石棒、石斧、石鏃、石庖丁等の石器、碗、瓶、高杯等の土器、貝飾、玉、貝腕輪、鹿角及其の細工品其の他、人類の遺物、人骨、動物の骨、貝殼等であつて、此の洞窟は歴史以前の人類の住居であるといふ事を示して居る。此等の遺物は唯雜然として洞から發見せられたのではなく、多少規則正しく上下に成層して出るのであつて、即ち上部からは比較的新時代のものが出て、下部に至るに從つて次第に古代のものが出た。今その地層の斷面と埋藏せる遺物の種類を圖式的に示すと左の通りである。

1, 土壤にして釉藥ある陶器，磁器，竹細工の小刀其の他金屬器を出す。近世のもの。

2, 祝部土器，金屬器を出す。

3, 祝部土器，赤燒土器，人骨(大人及小供)を出す。厚くして五尺に達する處がある。

4, 薄くして二寸乃至八寸位である。又は之を缺く處がある。祝部土器又彌生式土器並に骨器を出す。

5, 厚くして遺物の主要なるものは皆此の層より出す獸骨，魚骨，鱗，人骨，骨器，石器（石棒，石鏃，磨製石斧，石錐等）介輪等出づ。又厚さ二尺以上の介層がある。此の部分は一種の介墟である。

6, 石器時代の土器，獸骨，たゝき石，鮪骨等ある。把手の土器が多く此の下には砂層がある。何等の遺物を出さず，多少の礫を混ず。

各層は土壤、灰、介殼等の混合物である。第一層及第二層を除く外は皆多少の砂岩質、落盤を以て界とする各層の厚さは不定で略二尺乃至五尺である。第四層及第五層は境界を缺き、又第五層と第六層とも境界を缺く。

即ち第一層は極めて新らしい時代の瀬戸物、陶磁器の破片、小型の竹細工、金屬器などである。それから洞窟の横の壁には餘り立派でない彫刻がしてある。又鍵の手を附けたものと思ふが孔が開いて居る。之は近く乞食山窩が住んで、火を焚いて夏冬ともそこに居つたといふ事が解る。それ故最も表面にあるものは極新らしいものであつて、之は學術上何等價値はない。然し乍ら段々深く下の方に掘るに從つてそれ〴〵特別な地層をなして居る。

第二層からは所謂祝部土器及金屬器を出す。是は我々の祖先が主として使用したものである。即ち古墳から發見せらるゝもので約千數百年以前のものである。此の第一層と第二層とは唯埋藏して居る遺物が違ふ丈けで明らかな境界はない。第二層と第三層の境界は多くの落盤があつて境界を成して居る。落盤といふのは洞窟の天井から大小の岩片が重力の作用で下に落ちるのをいふのであつて、其の落盤した第二層と第三層との境界をして居る。其の岩片の小さいのは一尺内外、大きいのは六尺内外である。

第三層の中からは祝部土器、赤燒土器及大人と子供の人骨が出た。此の第三層は一般に厚くて、處によつて五尺に達する處がある。固より此處に六層に分けたのは此等の地層は規則正しく水の作用で沈澱したものではないから不規則であつて、其の厚さが部分によりて餘程違ふ。此の厚さは太凡何尺といふことはいはれない。右側左側と前の方と後の方とは大變厚さが違ふ。處によつては、第四層と第五層と一緒になり、第五層と第六層と一緒になつた處がある。第四層は薄くなつて二寸乃至八寸位である。祝部土器、赤燒土器、彌生式土器、人骨を出す事は下層と同樣であつて、第四層の特有といふものはない。此處に所謂彌生式土器といふのは、第一高等學校のある本郷彌生岡の貝塚から出た土器の事をいふので、

此の土器は其の他關東地方の貝塚から出る土器と頗る其の趣を異にして居る。

どういふ特徴かといふと、其の他の貝塚に出るいろ〳〵の土器は繩で以て模樣をしたもの、其の他凹みを付けたものなどがある。此の彌生式素燒土器に於ては一般に模樣が少い。あつても刷毛先きで付けた模樣がある位で、どうかすると緣に平行した筋が二三本引いてあつて、模樣としては極簡單なものが多い。此の如く普通の貝塚から出る物と違ふので、特別に彌生式土器としてある。是は從來の考では貝塚のやうな石器時代の遺跡から出る物でなく、もう一層新らしい物であつて當時彌生ヶ岡の貝塚から出たのは、是は例外であるといふ考を有つて居たのである。其の彌生ヶ岡の土器が第四層から出た。第五層は此の中で肝要な層であつて、遺物の多數は此の五層から出たのである。厚さも第五層が一番厚いのである。此の中に猪の頭骨及趾骨カモシカの下顎骨、タヌキの下顎、猿の兒の下顎骨及リスの頭骨、魚鱗、人骨、石器、石棒、石錐、石庖丁、介輪などがある。それで此の中の厚い處は五尺あつて、其の中の二尺以上は貝の層で、此の部分丈けを取つて見れば純粹の貝塚と言つて差支ないのである。石庖丁は斯くの如く輝石安山岩の板狀節理を呈する平石であつて、一方を薄く研磨し又にして庖丁にしてある。さういふ岩石を利用して、いろ〳〵の物を拵へてあるが石棒は斯樣に綺麗に研いてある。介輪は側壁に極近い處から出たのであるが、石灰質の砂岩の角礫岩の狀態をなす者の中に埋藏せられて居る。それは此の邊の砂岩は石灰質であるから、石灰質を含んだ水が上から流れて、それがセメントして石灰角礫岩の狀態をなし、恰も外國の洞内にあるボーンブレキシアである。第五層と第六層との間にも落盤の境界がある。第六層になると上の樣子が違つて居る。第五層迄は彌生式土器が出たが第六層から出るのは繩

紋土器である。即ち關東地方の石器時代の遺跡から出る者と同一の土窟である。其の他獸骨、タ、キ石、魚骨などがある。此の下へ這入ると砂であつてもう此處からは何等の遺物も出ぬ。第五層上から出る彌生式土器は祝部土器、走燒土器等と共に我々日本人祖先の遺物であつて、元我々日本人祖先は少くとも日本に來てから石窟を使つたといふ事をいつて居るが、之は專ら東北地方及關東平野の遺跡に就て調べたのであつて、關西地方、近畿地方の遺跡を調べて見ると、我々日本人祖先に日本に於て石器を使つたといふ證據が澤山ある。此の彌生式は爭ふべからざる我々日本人の遺物であつて、一種の石棒、石斧、石鏃等が相共に發見された第五層を掘つた迄繩紋土器、即ち貝塚土器は出ないといつてゐたが、第六層から出たので非常に喜んで盛んに掘つたのである。

此の遺跡から出る貝の種類は鮑、蠣、赤貝、蛤、榮螺のやうなものが最も多いのである。魚津中學で採つた貝を調べると其の種類が十三種ある。又此の動物の事は動物專門家によつ調べた處では犬、猪、鹿、カモシカ、猿で、近頃の發見によると牛の左上顎見たやうなものが出た。是は前記の犬と共に家畜を持つてゐた證據であらう。是等の第一層、第二層等は層といつても主に灰、炭等を混ずる、土壤であつて普通の水の作用で沈澱した泥や砂とはまるで違ふ、

そこで次に起る問題は此の遺跡は、何人の如何なる種類の遺跡であるかといふ事である。此處に住んで居つた人民は種々なものである。アイヌも住み日本人も住み其の日本人の中で、舊い日本人も新らしい日本人も住んで居つた。而して此の洞窟は是等人類の住居でない人骨が澤山出るから、葬穴或は墓場でないかと、いふ人があるが、私共の考では是はどうしても住居跡と思ふ、それはどうかといふと、多くの土器を見ると、其の外部に著しく煤煙の附着したものがある。又灰と共に炭が澤山出る。是等の煤煙の附着した、土器及岩塊と木灰や炭が出る。又土窟、石器骨器等の如き日用品のある處から考へて見ると、確かに此處で食物を調理し此の洞窟內では、飲食もし、起居もしたといふ事が出來る。又灰のある處は幾分か地層が凹んで居る、それ故に洞窟は飲食起居共に營んだものと思はれる。今日此の附近の人々によると此の洞窟は冬も左程寒くなく夏も左程暑くないといふ事である。又此の奥には十分飲料に供する事は出來ぬが、頗る清冷な水が出る。此の前の方には富山灣があつて其處には魚類が顧る豊富である。斯ういふことから見ると此の洞窟の中に住んであつたものが、或時期に於て落盤があつた。其の爲めに人間が使用した品物と共にベタンコになつた、其の後に又他の人間が住んだのが復落盤のために絶え、又他の人類が來たといふやうに、今日迄幾度か人類が入れ替つて此の洞窟內に住居したものと思はれる。恐らく此の多數は日本人の骨と思はれる。只おかしい事實としては、人骨に朱の塗つてあるものがある。之は故意に塗つたに違ひないと思ふが、一說には骨となつて塗つたのでなく、多分生きてゐる中に肉の上に裝飾物に塗つた朱が、其の人が亡くなつて肉が腐つて自然その朱が骨に附いたと言つて居るが、それは餘り穿ち過ぎた說ではないかと思ふ。但し骨の朱塗りしたのは何の爲めであるか是は頗る說明に苦しむのであるが、或は一度埋めた處の骨を返して何かの迷信のために朱で塗つたのであるか、普通の考では說明仕兼ねる事實である。又歷史、地理の上田三平君の記事の前に文學博士喜田貞吉君が一頁餘の記事を書かれたが、其の中に此の洞窟は住居ではない、一の芥溜である。時として墳墓の地であつたといふことを言はれて居る。其の證據には斯ういふ洞窟の中に而も獵などをして住んでゐる譯は

ない。灰が隨分擴く擴つて居れば、其の室内の特に重要なるべき中央に於て甚だ廣き部分を爐としたと解しなければならぬ。之は不合理であるといはれて居る。然し灰が全體に擴がつたとて其の擴つて居る處が、悉く爐であつたと解しなくとも宜しい。其の中の一部分が爐であつて、其處に灰や炭があれば後で其處へ、いろ〳〵な物が乘ると灰は自ら擴り、又乘らぬでも灰や炭の始末が惡ければ擴る。灰の擴つた部分丈けが爐なりといふ理窟はない。又喜田氏は斯の如き奥深き室の渦卷き立てる煙の中で生活し得る事を想起するは不都合だと言はれるが、固より洞内で火を焚いて住む等は頗る愉快ではないが、古代未だ家の無い穴居した時分は已むを得ぬ事である。今日では穴居して其内で火を焚いて、其の中に起臥して居る者がある。況んや蒙昧野蠻の時代には洞穴内で火を焚いて住んだといふ事は有り勝ちである。

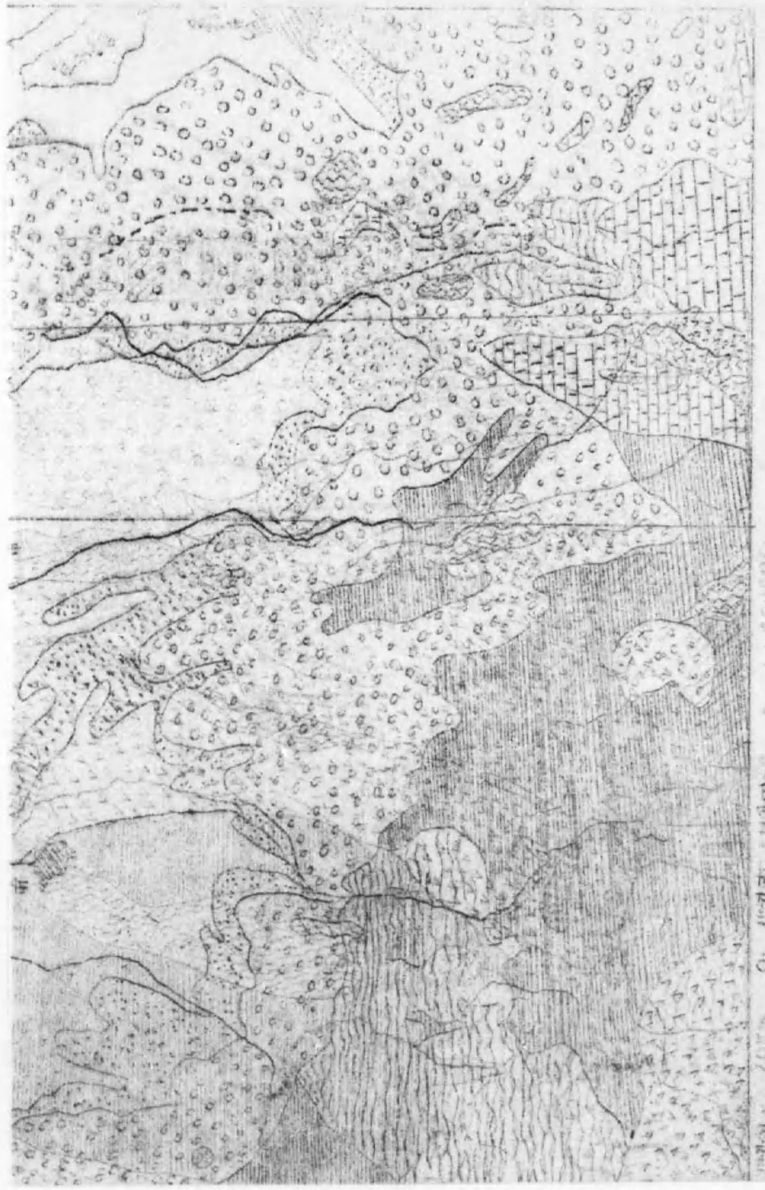
況んや又外國にも洞窟内を住居とした例は澤山あるに於てをやである。夫れ故に私共は此の氷見の洞窟は矢張り一種の住居跡であらうと考へる。之を要するに日本では斯る洞窟の中から地學上、考古學上貴重なる材料を發見したといふ事は初めてである。そういふ點に於て此の遺跡は最も注意すべきものである。且その遺物の埋藏の狀態が層の上下により、新らしいと古いの違があることは恰も層位學上から地質を研究するに當りて最も古い即ち最も下にある地層の中から最も古い化石が出て、上に至るに從つて新らしき化石が出ると同じことで、唯一個の洞窟であるが、下層からは最も古い人類の遺物が出て上の方に至るに從つて次第に新しい人類の遺物が出るといふのは、層位學上の化石の地層中に埋藏せられて居る事實と一致して居る。此の洞窟のことは此の土地に住む者として、我々の最も注意すべきかと思ふ。（理學士、佐藤傳藏稿）

此の洞窟は大正十一年三月八日史蹟として指定せられ、公益上必要止むを得ざる場合の外現狀の變更及遺物の採取を許可されない事となつた。

加納の横穴群

氷見驛の北西約一里加納村加納山の山腹に三十八個の横穴群がある。横穴は古代の墳墓で古墳の一種である。此の横穴の内から人骨、直刀、金環、曲玉、切子玉、管玉、齊瓦、土器等多數出た。

氷見郡内で此の他に於て横穴群の存在するは、十二町伊奈佐山の横穴群であつて、共に保存の必要がある。



昭和四年三月廿七日印刷
昭和四年三月三十日發行

【非賣品】

編輯兼發行者　富山市小學校長會

右代表者　松井賢治

富山市蠟磨町七番地
印刷者　藤田政次郎

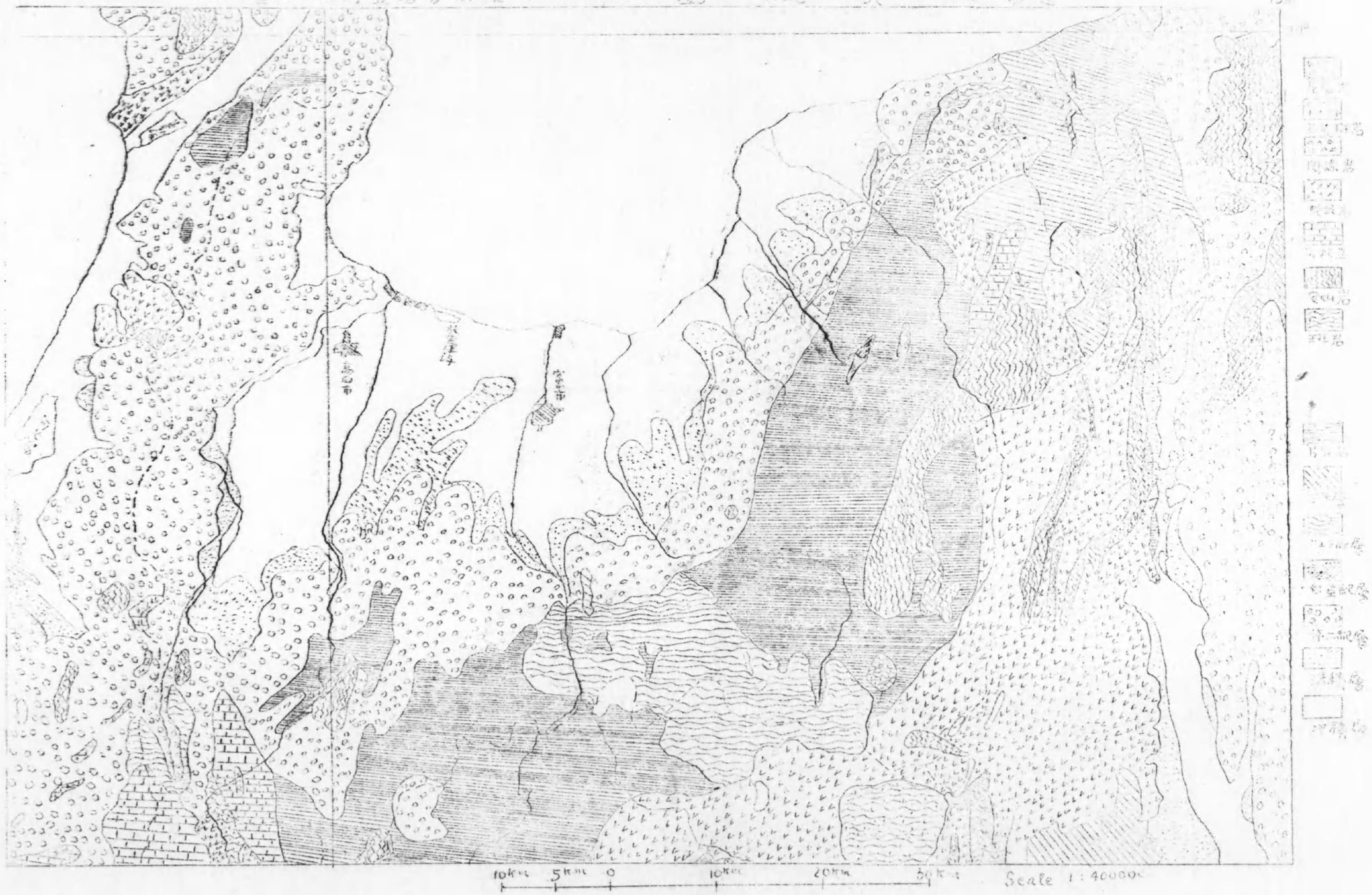
富山市蠟磨町七番地
印刷所　藤田印刷所

電話一九三番

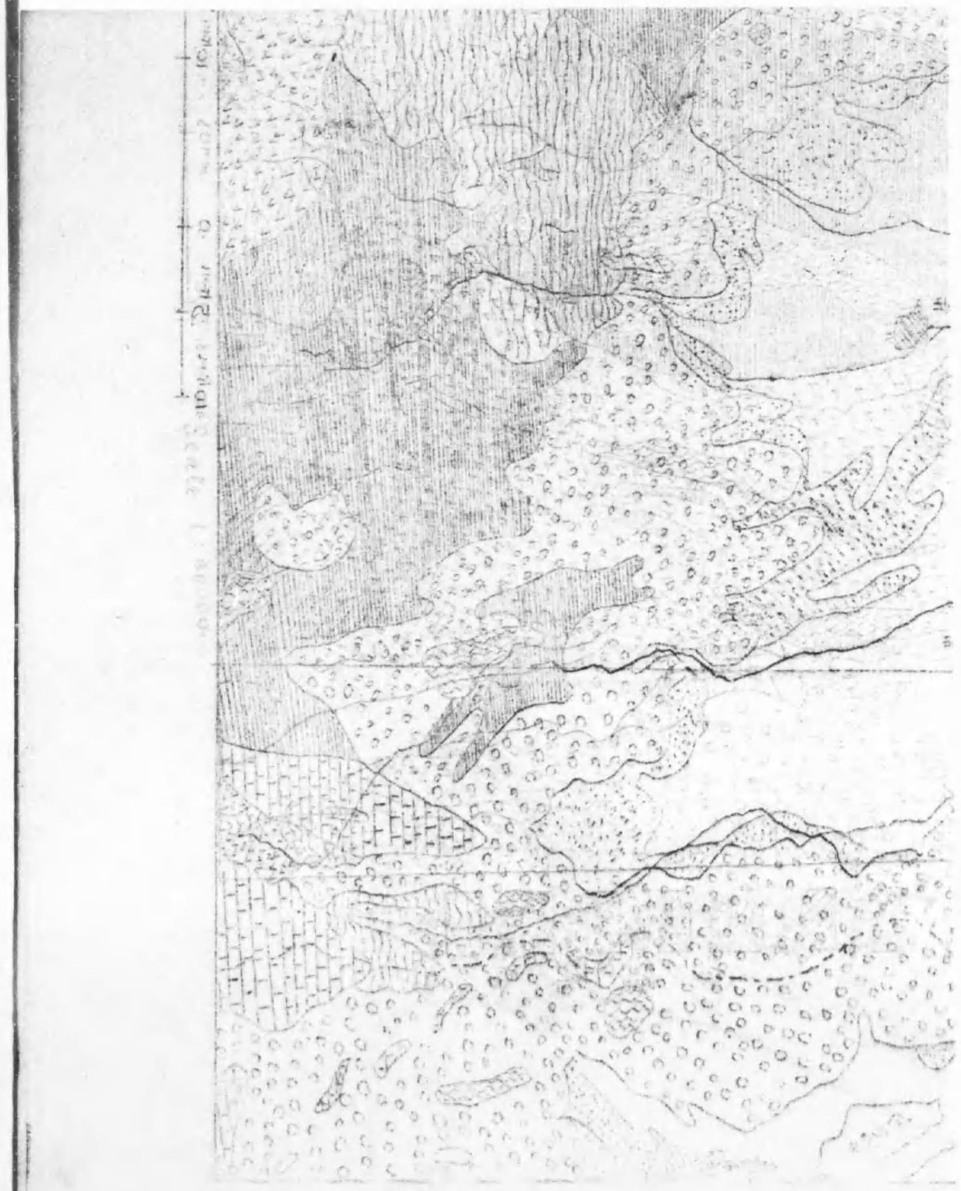
138°
34°
第三紀層
沖積層

地質概圖
137°
135°

10km 5km 0 10km 20km 30km
Scale 1:400000


10km 5km 0 10km 20km 30km
Scale 1:40000

324
369



終